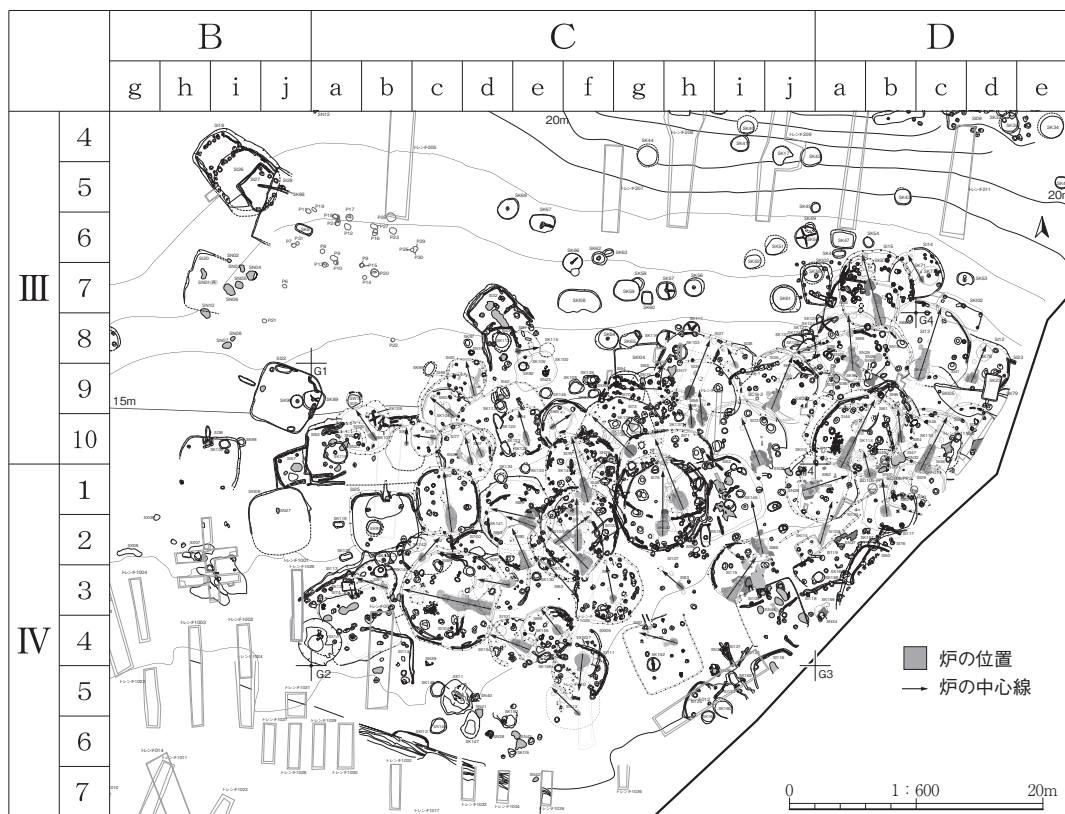
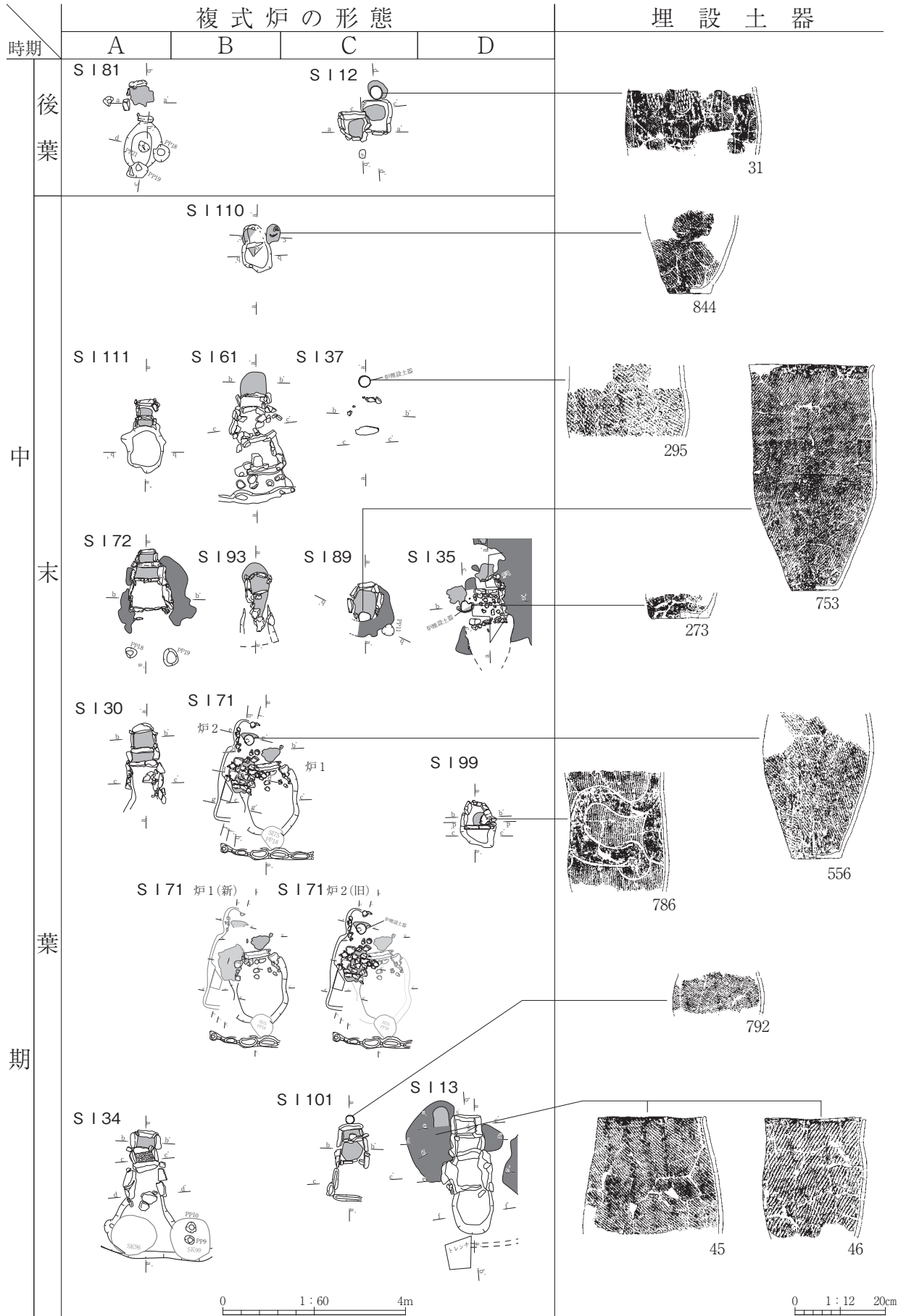


縄文時代中期末葉の竪穴住居跡



縄文時代中期の竪穴住居跡の炉の位置

第565図 縄文時代中期の竪穴住居跡分布図 (2)



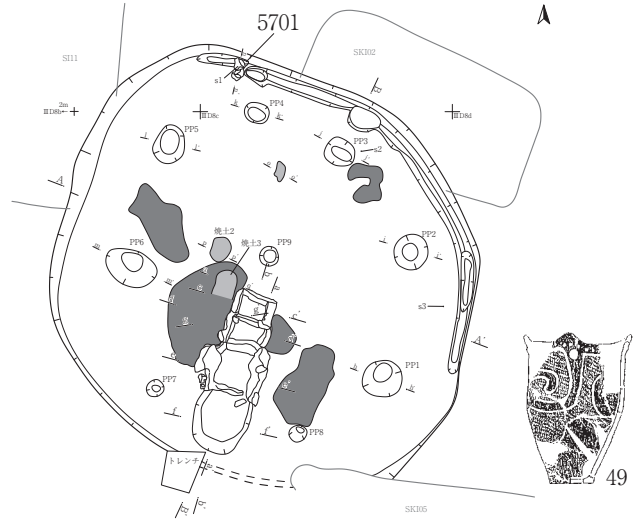
第566図 複式炉集成図

1 縄文時代

S I 13



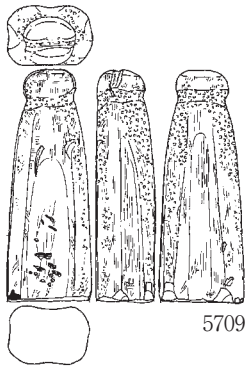
5701



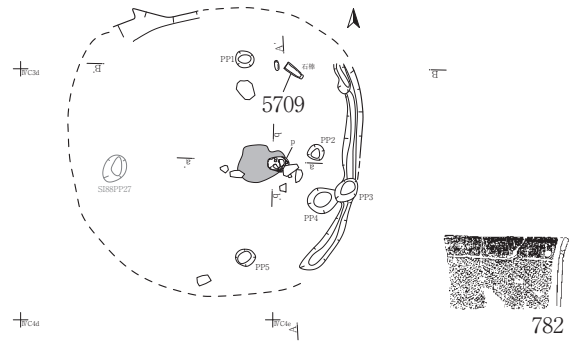
A

49

S I 97



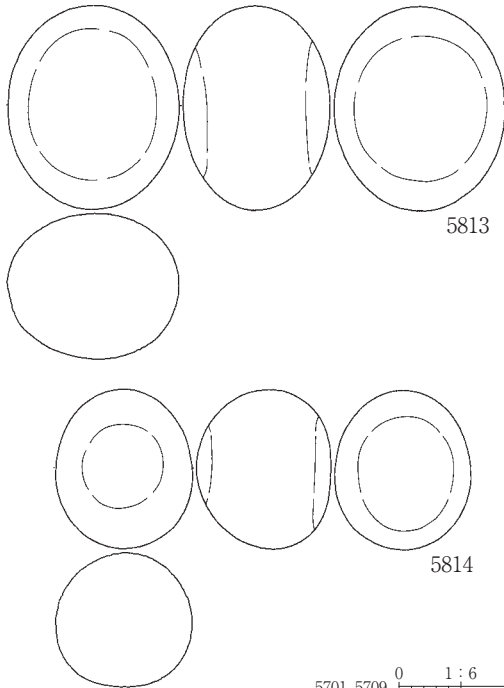
5709



A

782

S I 104

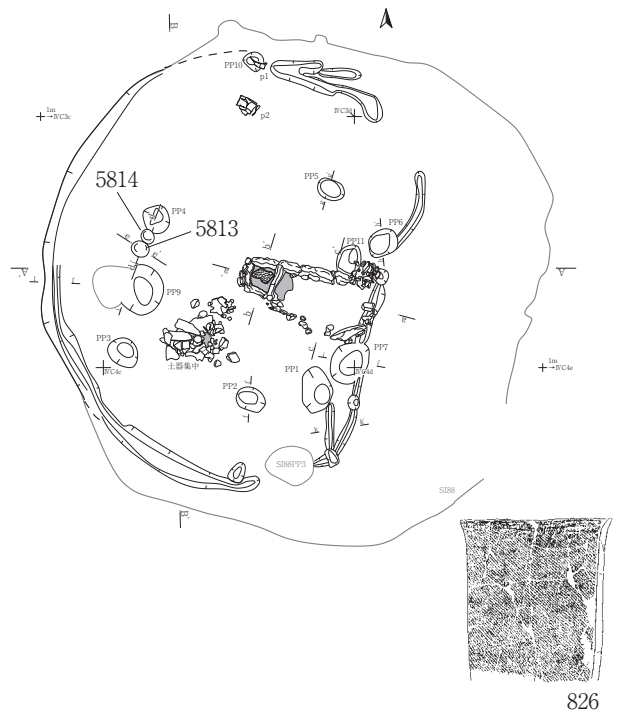


5813

5814

5701, 5709 0 1 : 6 10cm

5813, 5814 0 1 : 10 20cm



A

826

0 1 : 120 4m

49, 782, 826 0 1 : 12 20cm

第567図 縄文時代の石製品と竪穴住居跡内出土位置図

とが指摘されている（註3）。沢田Ⅲ遺跡の事例も、縄文時代中期の竪穴住居内の炉と反対側の奥壁側の空間利用の在り方において重要な場所であったことを示す貴重な事例と考えられる。

土坑

土坑は尾根部から南斜面で確認した。平面形は円形で、断面形がフラスコ状やピーカー状を呈し、底径100～200cmほどで、壁・底面は基盤のマサ土を掘り込んでつくられている（註4）。今回の調査では、トチノキを主とする植物遺存体が出土したS K12土坑（註5）など、貯蔵穴としての用途を類推できる事例を確認できた。

集落

縄文時代中期後半の集落を構成する要素は竪穴住居跡と土坑である。竪穴住居跡は低地部を中心に分布し、特に調査区南側で中期中葉の出土遺物が比較的多く確認されたことから、同時期の集落跡がより南に広がっており、時期が新しくなると、標高の高い北側に向かって集落が形成されていく傾向が推測される。竪穴住居内の炉の位置は、等高線の低い南側に設定され、全体として放射状にみえる印象もあるが、扇状を呈する低地部という地形の制約のなかで竪穴住居が繰り返しつくられた結果と思われる。貯蔵穴の多くは尾根部から南側斜面の標高の高い範囲につくられており、低地部につくられた竪穴住居跡とは、明らかに用途の違いが意識され、つくられる場所が選択されたと判断できる。

（2）遺物

縄文土器、土製品、石器、石製品、動物遺存体、植物遺存体、自然遺物などがある。ここでは、主な遺物の特徴について、種別ごとに概観する。

a. 縄文土器

縄文土器は、出土量の大半を占める前期と中期の土器について、相当する型式ごとに沢田Ⅲ遺跡で出土した土器の特徴と変遷の様相についてまとめる。分類・記載にあたって、七ヶ浜町歴史資料館 2018、小保内 2008、茅野 2008、早瀬 2008、中野 2008、森 2008（『総覧 縄文土器』所収論考）を参考にした。

縄文時代前期の土器（第568～570図）

前葉（Ⅱ1）：大木2（2a・2b）、中葉（Ⅱ2）：大木3・4式、後葉（Ⅱ3）：大木5式、末葉（Ⅱ4）：大木6式に相当する土器がある。数量的には、大木2式、大木5式の占める割合が高い。

【大木2式】2a・2b式に2細分されるが、2b式が主体である。器種：深鉢。器形：口縁部が外傾する器形が多い。胴部は、曲線的な器形や直線的な器形がある。文様：口縁部や頸部に細い隆帯を巡らし、隆帯上に刻目や刺突が加えられる。地紋：口縁部への不整撚糸文・葺瓦状撚糸文（単軸絡条体第3類）を確認できるものは少なく、胴部全体に結節縄文（綾線文）が多段に施文されるものが多い（註6）。詳細を知りえていないが、力持遺跡などで確認されている白座式？に類似する土器も散見される。また、ループ文や羽状縄文が施文された土器は未確認であるが、組紐が施文された土器が数例確認される。当該時期（前期前葉）の可能性をもつものとして本分類に含めた（註7）。

【大木3式】器種：深鉢。器形：口縁部が外反する器形と胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形がある。文様：口縁部に無文帯が設けられ、地紋が施される胴部との境界を示し、頸部に太目の沈線・細い隆帯で直線・波状・円文が描かれる。この文様構成は、大木4式にも引き継がれていくと推測する。地紋：主に単節縄文が横回転で施文される。大木2式で多用された横位の綾絡文は無くなり、比較的大粒の縄目の原体が横方向の回転方向を踏襲して用いられる。この地紋は大木4式に継続し、連続性がみられる。

【大木4式】器種：深鉢。器形：胴部が曲線的で、湾曲して膨らむ器形が主になり、大型化する。

文様：口縁部（口唇部や内面）・胴部上半に円・波状・梯子状、幾何学的な文様を沈線や粘土紐で表現するのが特徴で、粘土紐は折り曲げられて連続して貼り付けられる。粘土紐の端部は調整されず、土器と密着していない。胴部上半に数単位で文様が構成され、地紋：縄目の大きな単節縄文の横回転を主とする。胎土に砂粒・礫が多量に混入し、大木3式と比べてやや雑な印象を受ける。

【大木5式】前後の時期（5 a・5 b）に分けられる。器種：深鉢。器形：胴部が直線的で、口縁部が広く開口する器形で、平縁と波状口縁があり、極端に大型化した土器もある。文様：大木4式の粘土紐の貼り付けが継承され、隆帯は太くなり、粘土紐上に刺突・圧痕が加えられる。粘土紐は細かく貼り継がれたものが多い。地紋の上に加わる文様は、大きな波状（稻妻）が粘土紐や沈線で表現される。頸部に隆帯を巡らし、口縁部と胴部を分けるが、器形的に分化していない。口縁部に大きな突起状の装飾を持つ土器も確認できる。貼り付けられた隆帯（粘土紐）の端部は調整されない。口唇部には刺突・圧痕を施す。地紋：大木4式で主体であった単節縄文に加えて、捺糸文、網目状・木目状など多様な単軸絡条体の縦回転が一定量を占めるようになる（註8）。また、希少例として大木5式から大木6式にかけて、オオバコ回転圧痕文が確認できる（註9）。胎土に砂粒や礫が多く混入する傾向は、大木4式から続く特徴である。

【大木6式】器種：深鉢。器形：出土量が少なく、詳細は不明だが、長胴形と球胴形の器形に大別される。前者は大木5式から継続する器形で、器形からも頸部の括れが明確になる。後者は前期末葉から中期前葉にみられる器形である。大木5式より器形による部位の境が明確になる。文様：粘土紐貼り付け（ボタン状の円文）、半截竹管の外側・内側を使用した沈線文、刺突列などで文様が描かれ、口縁部と胴部の違いは、文様構成でも意識される。地紋：単節縄文が用いられ、地紋のないものは沈線で文様が描かれる。

前期の土器の器壁（外観）の色調は、大木2式は、にぶい橙色・灰褐色、大木3・4式は、にぶい橙色・にぶい褐色、大木5式は、橙色・にぶい褐色・にぶい赤褐色を呈する割合が高い傾向を示す。

縄文時代中期の土器（第571～573図）

前葉（Ⅲ1）：大木7式（7 a・7 b）、中葉（Ⅲ2）：大木8式（8 a・8 b）、後葉（Ⅲ3）：大木9式、末葉（Ⅲ4）：大木10式に相当する土器があり、大木10式が大部分を占める。

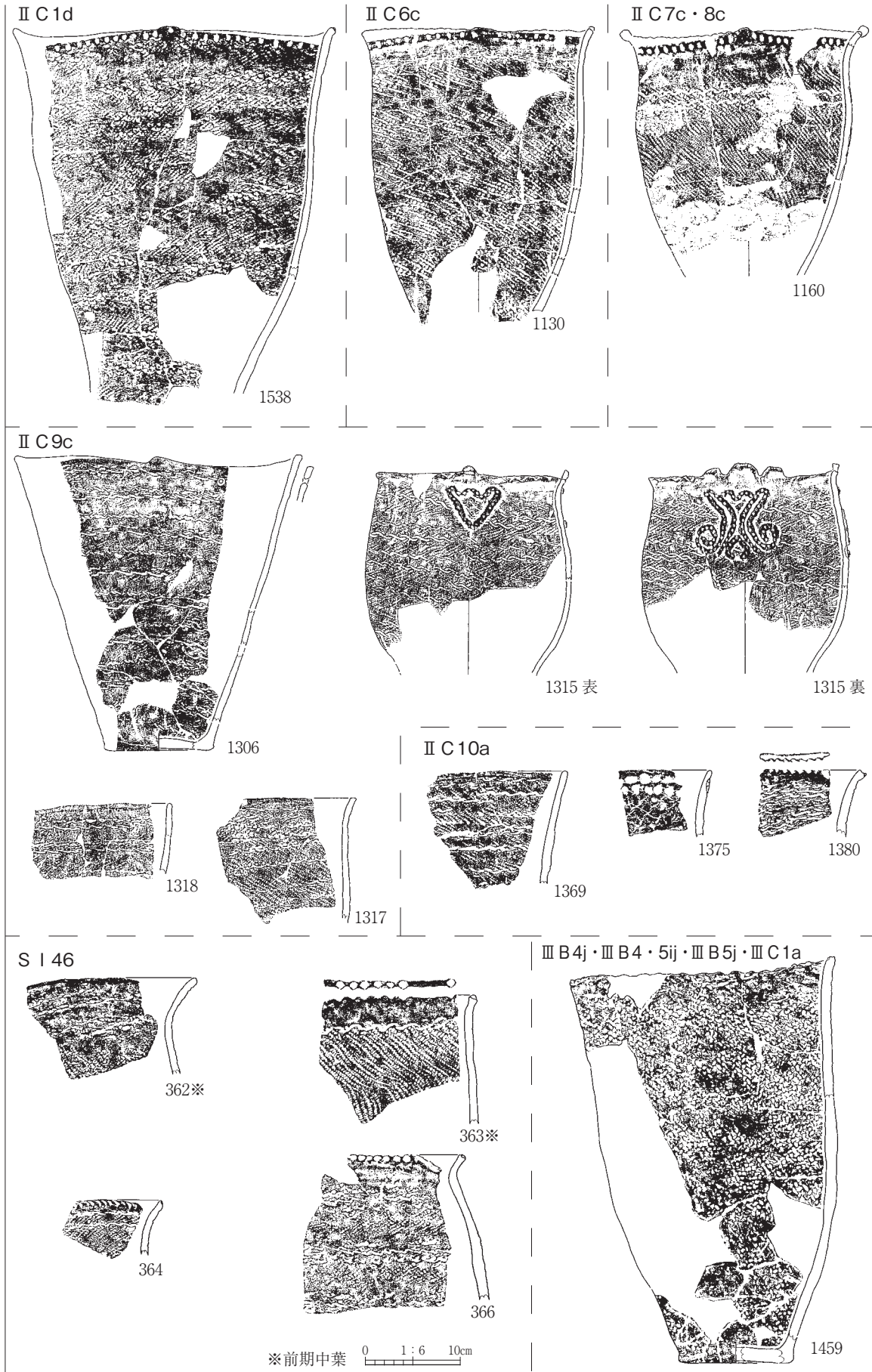
【大木7式】7 a・7 b式に細分される。資料は少なく詳細不明である。器種：深鉢や浅鉢。器形：深鉢は長胴形と球胴形がある。文様は、胴部上半に主に粘土紐貼り付けや沈線で、粘土紐には交互に刺突が加えられる。地紋：単節縄文の縦回転で結節縄文がみられる。7 b式では原体側面圧痕が、単独や隆帯と組み合わせて用いられる。原体側面圧痕は、後続の8 a式でも使用される。

【大木8式】8 a・8 b式に細分される。盛岡地区では8 a式を2細分、8 b式を3細分している。器種：深鉢。浅鉢。壺。器形：深鉢の器形はキャリパー形。樽形。胴部が膨らみ、口縁が外反する器形。キャリパー形深鉢は、大木7式から続き、胴部が大きく膨らみ、器形は大木9式にも継承される。文様：隆帯・沈線、隆沈線で垂下文・渦文・剣先文が地紋の上に描かれる。隆帯は丁寧に貼り付けられ、土器と密着する。地紋：単節・複節の縦回転が多く、8 b式では複節縄文が多用される。キャリパー形深鉢など口縁部と胴部が明確に分かれる器形では、口縁部を横回転、胴部を縦回転で施文する土器も存在する。

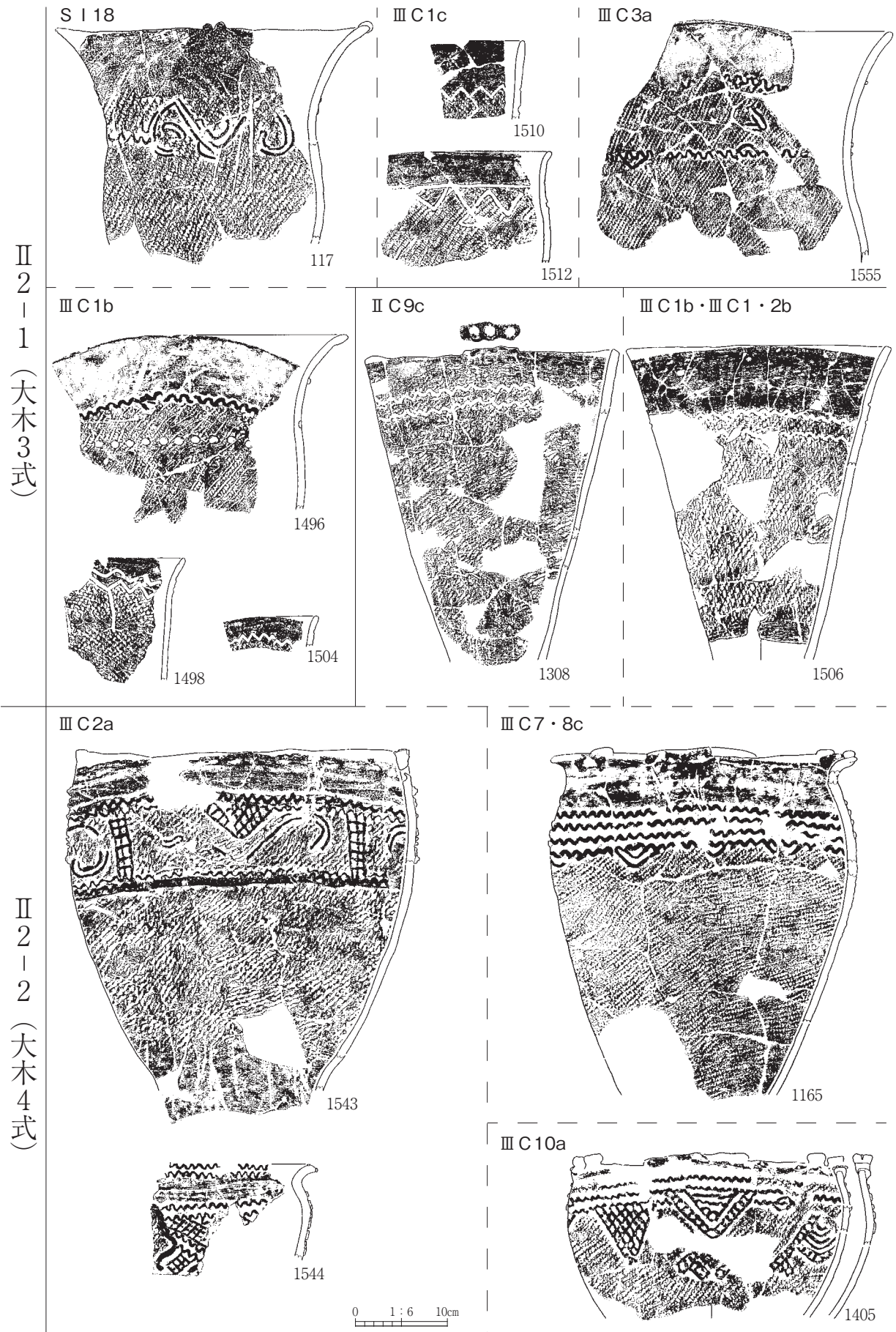
【大木9式】新旧2時期（9 a・9 b）に細分される。器種：深鉢。器形：キャリパー形、樽形、胴部が膨らみ、口縁部が外傾する器形がある。器形的には次第に不明瞭になる口縁部と胴部の区画が、文様で意識されるようになる。樽形土器は大木8 b式から継続する器形である。文様：隆帯・沈線で描かれるが、次第に沈線に移行し、渦文が円文・楕円文に変化し、縦区画が主流となる。区画を充填する刺突文もみられる。地紋：単節縄文の縦回転が多い。古い段階では大木8 b式で多用された複節がみられる。

【大木10式】新旧2時期（10 a・10 b）に細分される。器種：深鉢、壺、鉢、浅鉢。器形：口縁部が外傾、直立、内湾する器形がある。胴部が膨らみ、細長い器形がある一方で、胴部から口縁部が直線的に外傾す

II 1 (大木2式)



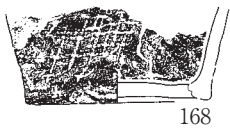
第568図 縄文土器集成図：前期前葉



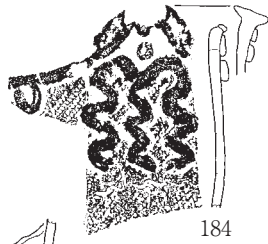
第569図 縄文土器集成図：前期中葉

II 3 (大木5式)

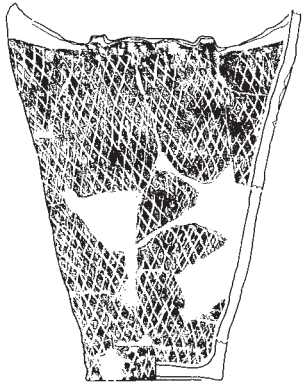
S I 19



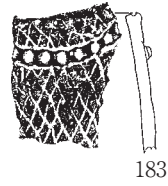
168



184



175



183

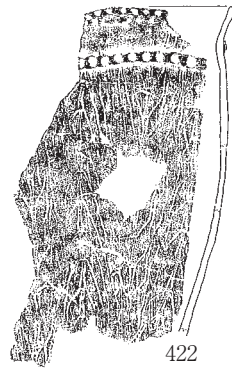
S I 57



419



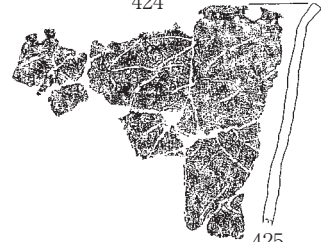
420



422

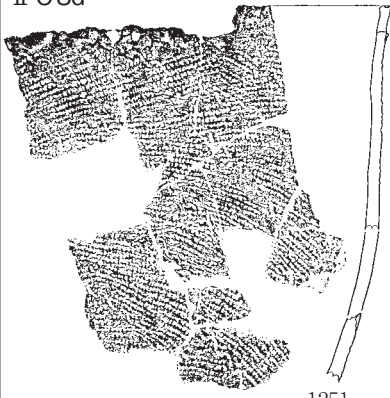


424



425

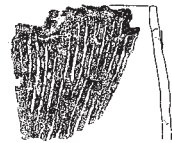
II C 8d



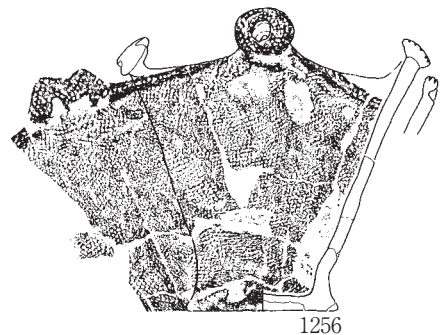
1251



1252



1269



1256



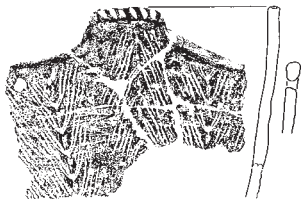
1262



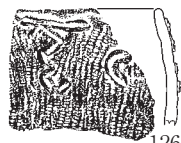
1263



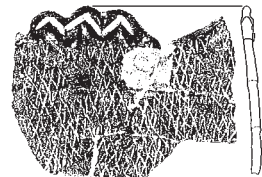
1265



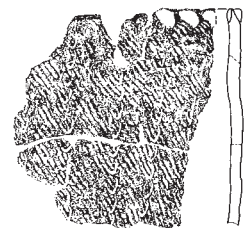
1261



1266



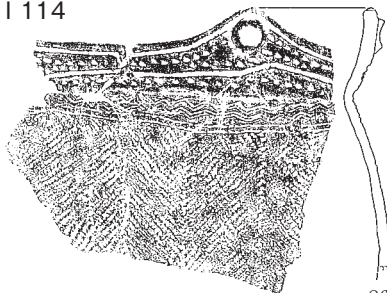
1267



1268

II 4 (大木6式)

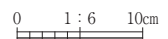
S I 114



862

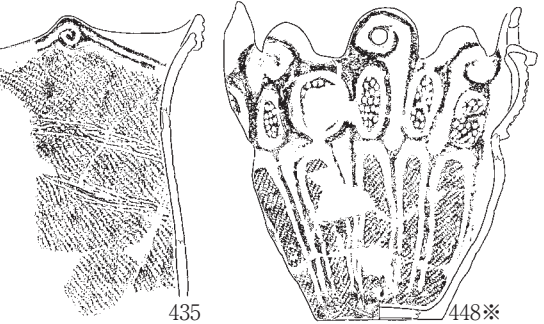
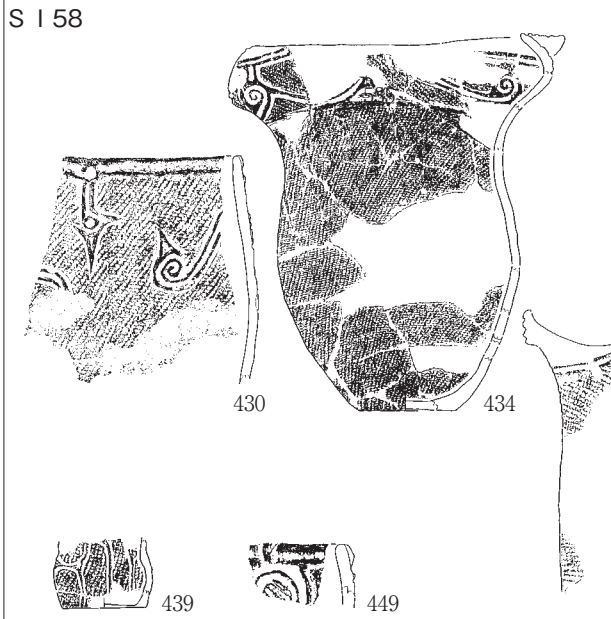
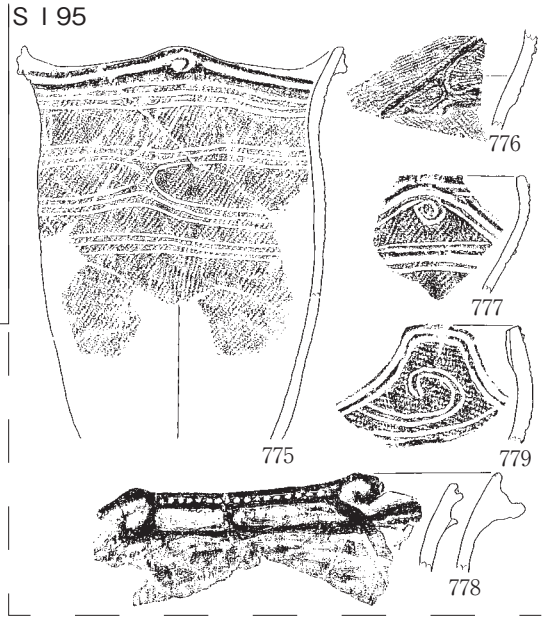
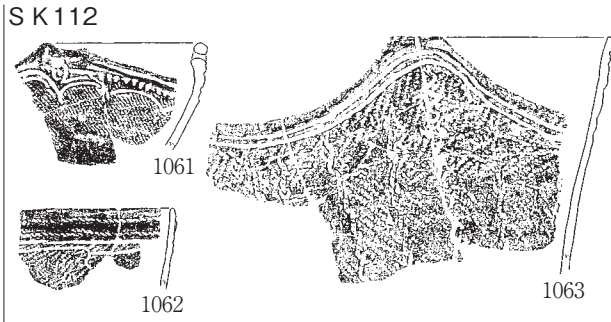


863

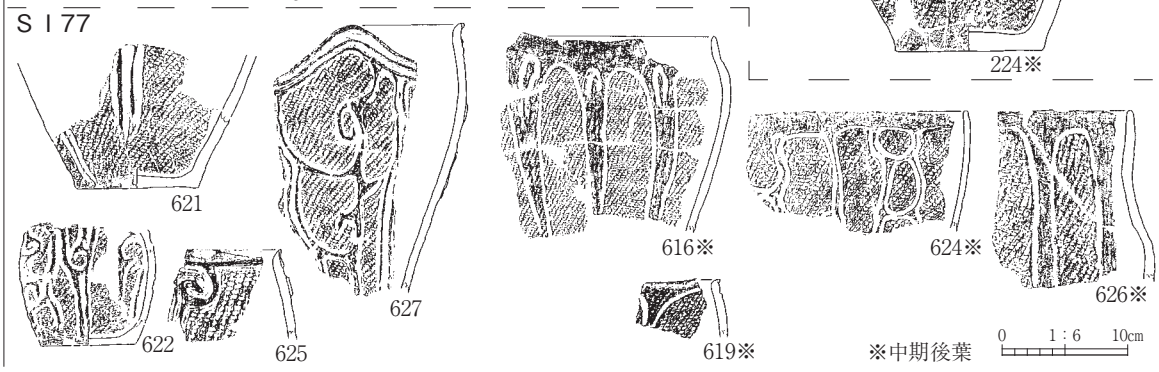
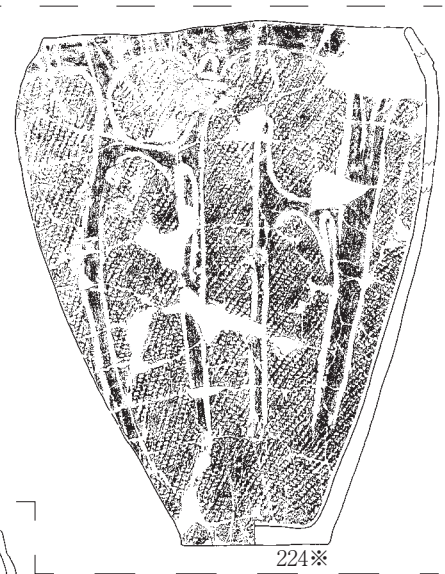
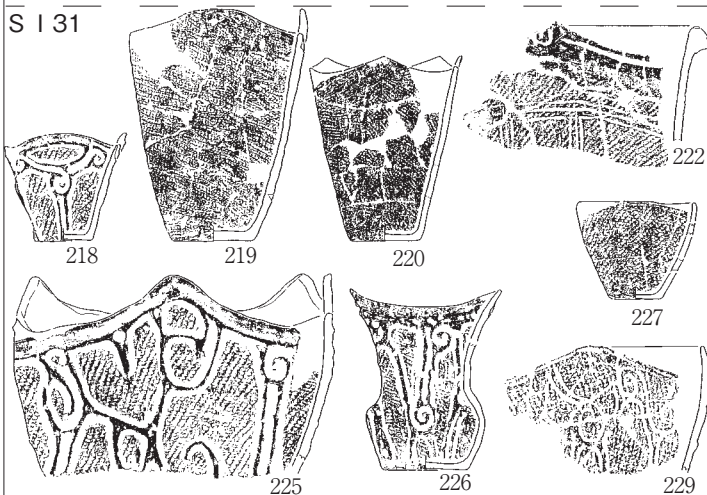


第570図 縄文土器集成図：前期後葉・末葉

Ⅲ 1 (大木7式)



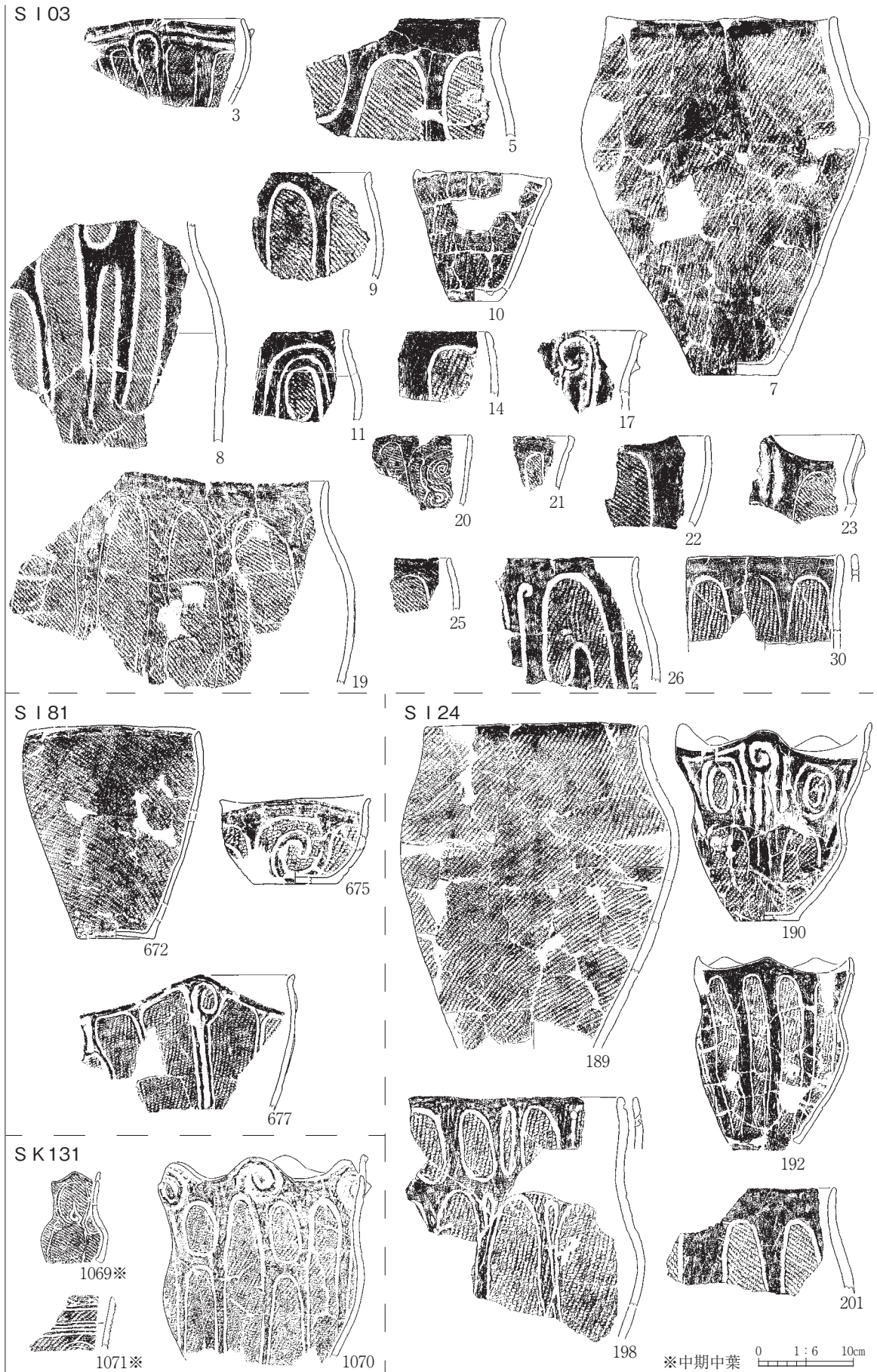
Ⅲ 2 (大木8式) · Ⅲ 3 (大木9式)



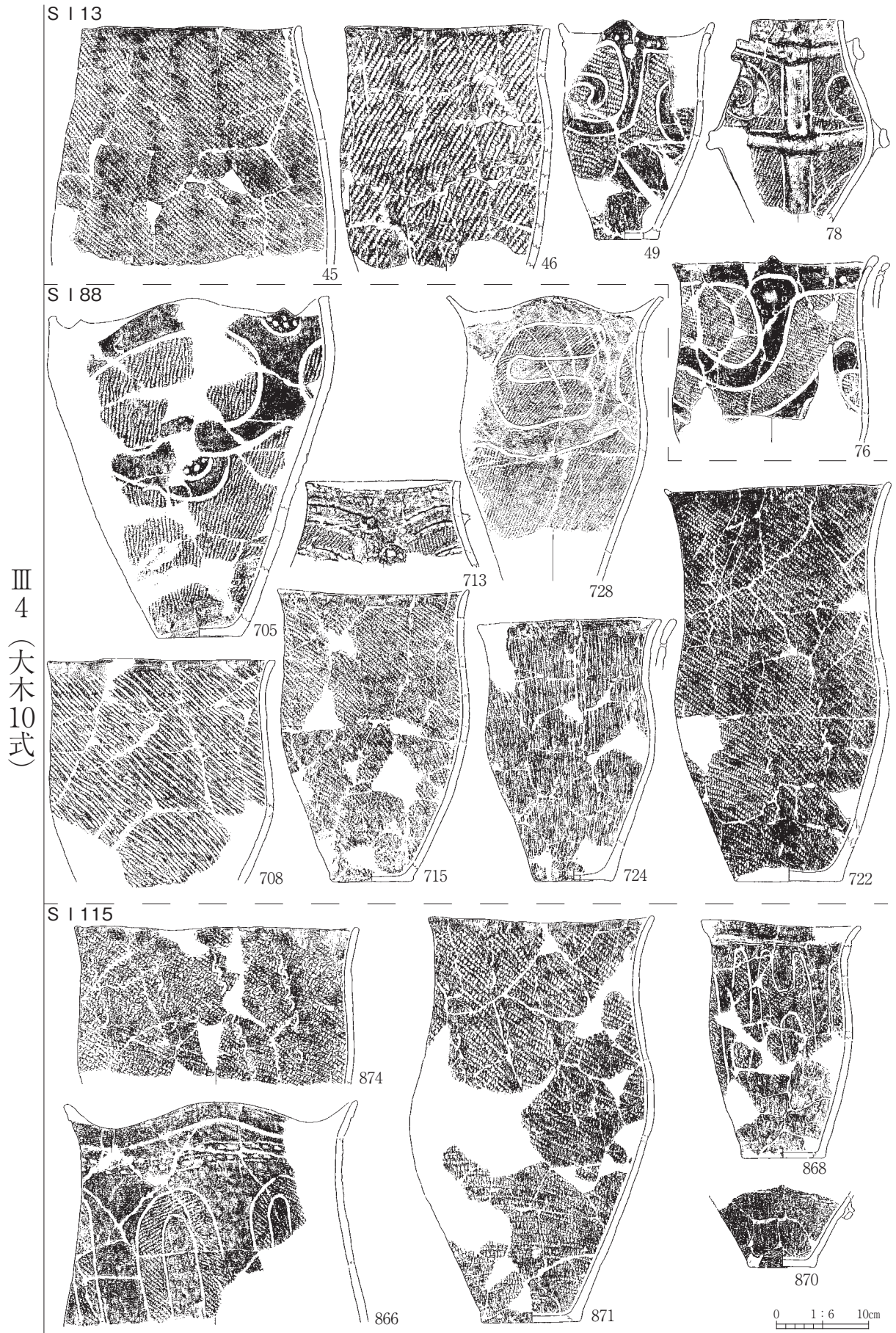
※中期後葉 0 1:6 10cm

第571図 縄文土器集成図：中期前葉・中葉・後葉

Ⅲ 3 (大木9式)



第572図 縄文土器集成図：中期後葉

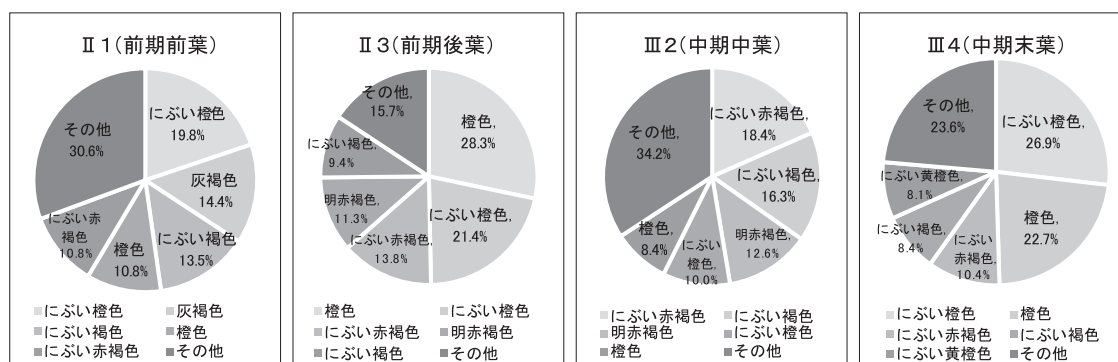


第573図 縄文土器集成図：中期末葉

る器形もある。壺形土器も一定量あり、外面に朱の痕跡が確認できる。文様：隆帯・沈線・刺突が用いられる。文様が描かれる範囲は、胴部全体から次第に胴部上半の範囲に狭まる。磨消縄文と充填縄文の手法が確認できる。地紋：単節縄文に加えて、撚糸文が一定量みられる。いずれも縦回転である。単節縄文では結節縄文（綾絡文）が加わる事例が多い。縦位の沈線が櫛状に施文されたものもあり、縦方向の意識がうかがえる。地紋だけの深鉢でも口縁に無文部分を持つものがあり、沈線で口縁部を区画して設けられた無文帯との共通性がみられる。炉の埋設土器や、竪穴住居内の出土事例では、地紋+文様の精製土器よりも、地紋のみの粗製土器の割合が、それ以前の型式より高くなる印象が見受けられる（註10）。

器の器壁（外観）の色調は、大木7～8式は、にぶい赤褐色～にぶい褐色と幅広く、大木9式では、明赤褐色～にぶい褐色、大木10式では、主ににぶい橙色・にぶい黄橙色・にぶい赤褐色の傾向を示す。縄文の撚りの方向は、無節はL、単節はLR、複節はRLRが多く見られる傾向がある。

縄文土器の色調傾向



この他、東北北部地域の土器、榎林式・最花式なども散見される。およそ榎林式は大木8b式、最花式は大木9式との併行関係が確認できそうである。

b. 土製品

土製品は、三角壺形土製品について中期末葉の出土事例を確認している。キノコ形土製品も中期後葉から末葉の出土事例を確認している。その他、多くの土製品は中期に帰属するものが多いと推測する。

c. 石器・石製品

石器は、北上山地産の比較的近い地域で石材を調達し、製作・使用していたようで、器種・点数の多さは、土器の量と併せて、集落を支えた物量としては十分である。大型の石鏃や石匙・石筥、赤色頁岩製の異形石器など、前期に帰属すると推測される遺物も散見されるが、明確ではない。磨石では、断面三角形を呈するものは少ないが、礫の側面を使用する磨石は一定量確認できたものの、やはり前期・中期のいずれか、帰属する時期を明確にできなかったことは、今後の課題である（註11）。

石製品は、玦状耳飾・男根状石製品は前期、石棒・円礫は中期末葉と考えられる。石棒の大きさには大小あり、精緻なつくりの中期末葉の小型の石棒の事例を確認することができた（註12）。

d. 動物遺存体と植物遺存体、自然遺物

動物遺存体は、アサリ主体の貝層で、竪穴住居跡や土坑への廃棄事例を確認した。山田湾周辺の遺跡の貝層の貝殻組成をみると、各時代を通じてアサリ主体の貝殻組成となるが、縄文時代では特にその比率が高い。土坑から出土したイヌの骨の事例も確認した。植物遺存体は、土坑から出土したトチノキ、竪穴住居跡から出土したクリの炭化種実の事例がある。いずれも食料として意図的に選択され、保存していたものが食されずに遺ったもので、当時の食料事情を推察することのできる貴重な事例である。

自然遺物には、アスファルトの塊2点がある。うち1点は土器内に入れられた状態で出土した。

2 古 代

(1) 遺 構

古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡26棟、土坑数基、平安時代後半の鉄生産関連遺構（工房跡4基・炉跡20基・炭窯跡13基）を確認した。以下、時代、遺構ごとに特徴を概観する。

a. 古墳時代後期から奈良時代の集落（第580図）

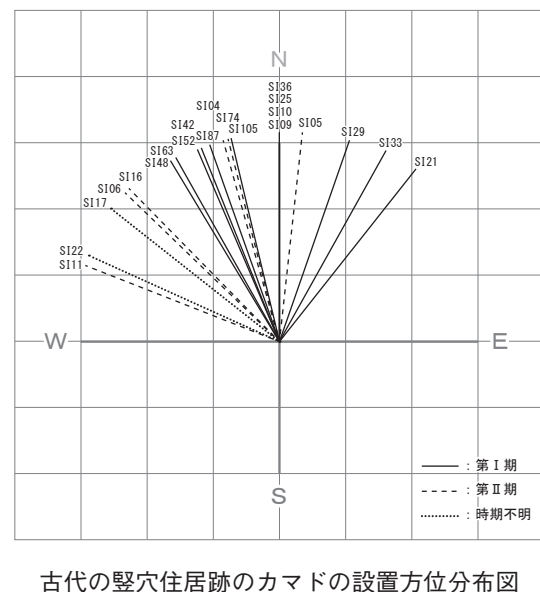
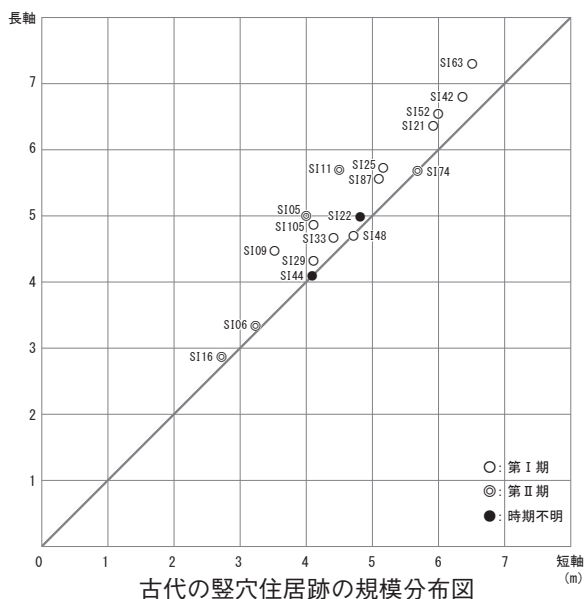
時期は、第Ⅰ期（7世紀前葉から中葉）と第Ⅱ期（7世紀末から8世紀前半）、第Ⅲ期（9世紀末から10世紀前半）に大別される。ここでは主に第Ⅰ期と第Ⅱ期の集落について竪穴住居跡を中心に概観する。

第Ⅰ期の竪穴住居跡は13棟（S I 09・10・21・25・29・33・42・48・50・52・63・87・105）が該当する。規模は、最大7.5m（S I 63）、最小4.3m（S I 29）で、一辺5mを超えるものが半数以上を占める。平面形は、隅丸方形を呈するものが多い。柱穴は、四隅を結ぶ対角線上に位置する4本柱（S I 29・48・52・63・87・105）の配置が確認できる。壁溝が確認できた5つの竪穴住居跡（S I 21・25・29・50・52）は、規模が比較的大きなものである。カマドの設置方位は、北東～北～北北西の範囲にあり、第Ⅰ期古期と考えられるS I 21竪穴住居跡のカマドの設置方位は、もっとも北東側に片寄っている。付属施設として、S I 105竪穴住居跡でカマド脇右側に小土坑が確認され、S I 52・105竪穴住居跡でカマド煙道の北西側壁の外側に張り出す小型の掘り方を確認した。

第Ⅱ期の竪穴住居跡は7棟（S I 02・04・05・06・11・16・74）が該当する。規模は、最大5.6m（S I 11）、最小2.9m（S I 16）で、全体として第Ⅰ期の竪穴住居跡より規模が小さく、形状は隅丸方形を呈するものが多い。壁溝は、比較的規模の大きな2つの竪穴住居跡（S I 05・11）で確認した。柱穴は、主に4本柱（S I 05・74）の配置が確認できる。カマドの設置方位は、北から西北西にかけて分布し、第Ⅰ期より西側に片寄っていく傾向がある。S I 06竪穴住居跡のカマドのように竪穴の角に片寄って設置されたものもある。

竪穴住居跡の分布は、第Ⅰ期は低地部を中心に密に分布し、第Ⅱ期には低地部の他、谷部、尾根部へと広範囲に分布し、居住域が広がっていく傾向がみられる。

（佐藤あゆみ）



b. 平安時代の鉄生産関連遺構（第574図）

C区北東部の南側に開放した標高27～25mの谷部（以下、北東谷部）で、鉄生産関連遺構を確認した。炉跡19基と炉跡に伴う工房跡3棟、炭窯跡12基から構成される。東西約14m×南北約10mの狭い範囲で重複が著しく、鉄生産を行うために意図的に選択された場所であったと考えられる。以下、遺構ごとに特徴をまとめる。

現況と遺構の立地

北東谷部は、斜面上部から谷まで大きく3段の平坦面が斜面奥側をカットし、谷側に盛土を施して造成されていた。鉄生産関連遺構は、1段目の斜面部分にS W01・02炭窯跡が検出され、2段目の平坦面部分にS X W01・S W03が検出されたが、この斜面部分と平坦面部分は大きく削平を受けていた。一方、それ以南の谷側部分には分厚い盛土が確認でき、盛土除去後に平坦部分で鉄生産関連遺構が検出できた。この部分は調査の進展に伴い、最終段階で下層に古代のS I 21竪穴住居跡を確認した。さらに1段下がった平坦面部分の3段目にも確認された。

炉跡の検出

北東谷部では、包含層掘削の段階から鉄滓・炉材等が検出され、機械掘削の段階でS X W01鉄生産関連炉跡の炉材粘土の集積が確認されたことから、鉄生産関連遺構が検出される可能性があることを認識して調査を行った。当初、炉材粘土・焼土・鉄滓等を認識した段階で、基本的には鉄生産関連炉跡（S X W）として遺構番号を付与して調査を行ったが、結果的にクリーニング段階で認識した多くの遺構が、実際には遺構ではなく、植物痕跡などの攪乱と判断された。故に遺構名に欠番が多い。また、遺構の重複が複雑で、調査の難易度が高く、調査時の遺構の認識の不明故に炉跡として命名したが、後に廃棄土坑として他の炉との組み合わせとして解釈した遺構、炭窯跡として調査した遺構が炉跡の下部構造としての可能性を有するなど、多岐の解釈と可能性を模索する調査となった。

このような調査を経て、これまで周辺遺跡の調査で認識されてきた鉄生産関連遺構などとも比較し、その可能性があるかと判断した遺構は、炉跡ア：円形～楕円形、炉跡イ：長楕円形、炉跡ウ：楕円形の大きく3つのタイプに分類が可能と考える。炉跡は長軸を等高線に直交するようにつくられている。

- ア) 粘土・焼土が円形～楕円形にめぐり、内部に暗褐色から黒褐色・黒色の炭化物や焼土などを含む土壌で形成されたもの。これらの遺構内部を掘削したところ、ほとんど深さはなく、粘土・焼土部分自体もほとんど薄皮1枚で残っていた（cf. S X W01・10鉄生産関連炉跡など）。
- イ) 粘土・焼土が長楕円形にめぐり、内部に暗褐色から黒褐色・黒色の炭化物や焼土などを含む土壌で形成されたもの。これらは、炉の構造を確認した基本的な炉跡である。
- ウ) 楕円形の炭化物や焼土で埋土が形成されたもの。内部を掘削すると、粘土・焼土、炭化物と土壌が検出され、最下層の土坑壁周辺部に焼き締めによる赤褐色化した部分がみられた（cf. S X W03・04鉄生産関連炉跡など）。

炉跡の構造

炉跡アの構造は、粘土・焼土が円形～楕円形に巡り、内部に暗褐色から黒褐色・黒色の炭化物や焼土などを含む土壌で形成された炉跡で、ほとんど深さが浅い。S X W01・10鉄生産関連炉跡の痕跡が、どのような経過の結果、残されたものか、また炉跡と判断してよいか、躊躇われる事例である。

炉跡イの構造は、基本的に長楕円形もしくは「8」字型に近い2つの円を合わせた形状の粘土・焼土層として確認した。調査は、長軸1本と短軸2本の土層観察用アゼを残し、全体を均等にスライスするように掘り下げている。

S X W09・17鉄生産関連炉跡・S X W22鉄生産関連炉跡では、遺存状況に相違があるが、遺構北側

(山側)に炉底と考えられる被熱面が確認され、一部は炉壁、最下部も遺存していた。遺構南側には粘土・焼土・鉄滓などが密集した状況で確認された。これらを除去すると、北側に炉跡、南側に排滓坑と推測される構造が確認できた。S X W09・17鉄生産関連炉跡・S X W22鉄生産関連炉跡は、一度のみの鉄生産の操業の結果できた形状の可能性はある。

S X W16鉄生産関連炉跡・S X W21鉄生産関連炉跡では、複数の炉底や炉壁最下層と考えられる輪郭を確認している。よって、長楕円形の粘土・焼土として検出される炉跡は、当初の構造が不明確ながら、炉跡と排滓坑(前庭部)の構造が、使用を繰り返すたびに再構築されて、できた可能性がある。ただし、本来の位置を留めていない炉壁材も多く、実際の炉底の数は不明な部分もあり、検討を要する。また、複数の炉底部が検出されたS X W16鉄生産関連炉跡やS X W21鉄生産関連炉跡では、各段階でそれ以前の段階の炉の痕跡を破壊している可能性もあるが、最終段階の痕跡も排滓坑(前庭部)的な構造が全く検出されなかった。このことは、すべての炉跡の構造を、一律に炉と排滓坑(前庭部)の組み合わせとして認識することができるのか、検討を要する事例である。

炉跡ウは、形状・特徴や炭窯跡との比較から、炭窯跡と考えることが可能であろう。

工房跡

工房跡は4棟確認した。北東谷部の3棟は、径4mほどの隅丸方形で、竪穴状に掘り込まれている。炉跡を伴うが、柱穴その他の付属施設は確認できなかった。低地部で確認した1棟は、径4.0～3.5mの円形基調で、竪穴状に掘り込まれ、床面に炉跡・鉄床石・柱穴を確認した。

炭窯跡

炭窯跡は13基確認した。北東谷部で確認したのは12基である。平面形は長楕円形と円形の大きく2つの二つのタイプに分かれ、前者が多い。長楕円形の炭窯跡は、長軸約450～200cm、短軸約140～100cmで、長軸を等高線に沿って設定しているものが多い。壁面・底面の一部に被熱で赤色化した箇所があり、底部に近い下層に炭化物層がある。鉄生産関連炉跡と上下関係を持ち、炉跡の下位に位置する炭窯跡は、鉄生産関連炉跡の下部構造であった可能性もある。出土した炭化材の樹種はクリである。

廃滓場

北東谷部に鉄生産関連遺構群が確認されたことから、斜面下位に遺構群が延びる可能性、廃滓場が形成されている可能性を考慮し、鉄生産関連遺構群の下位の斜面地で試掘調査(トレンチ3本)を行った。調査区内では炭窯1基(S W13炭窯跡)を確認したのみで、廃滓場の存在は確認できなかった。斜面がさらに下位に続くため、廃滓場はさらに下位に形成されているか、もしくは流出した可能性もある。

変遷

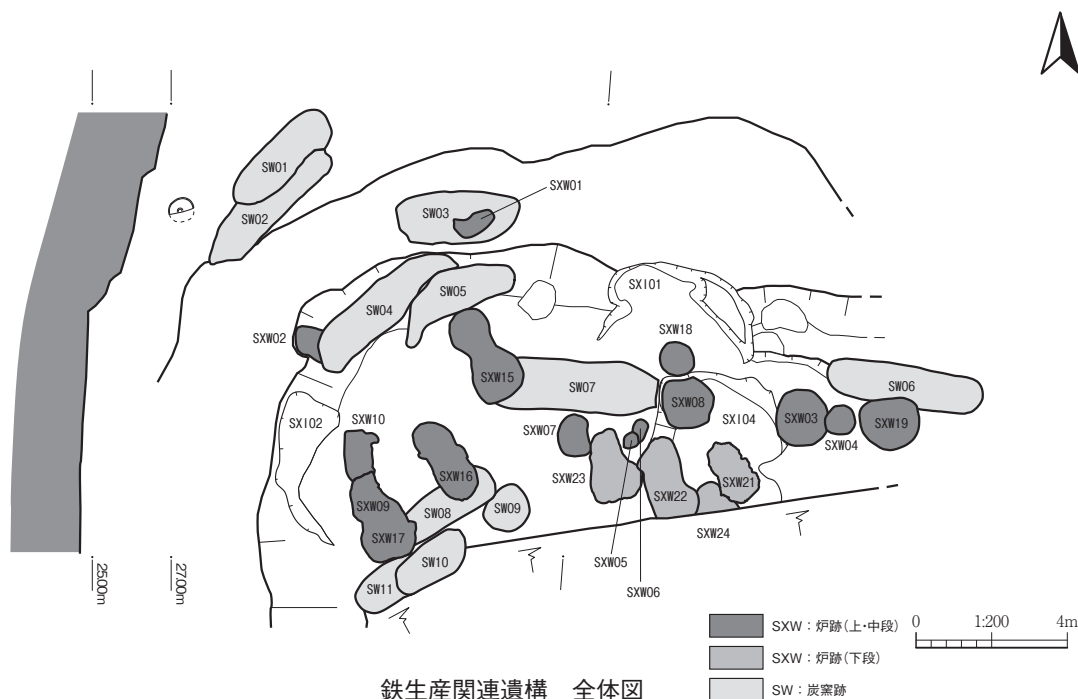
北東谷部の鉄生産関連遺構群の変遷は、大きく2段階に分けられる。概ね下段・中段から中段・上段に場所が移動している。

【第1段階】

S I 21竪穴住居跡の埋没後の平坦面を利用して第1段階の鉄生産が開始される。竪穴住居廃絶後の平坦面を作業場として使用したと考えられるが、炉跡自体は住居位置の東側に集中する。一方、埋没した竪穴住居部分には炭窯が位置しており、この部分を炭窯として使用し、そのまま資材置き場に転用した可能性もある。第1段階終了後に造成を行い、平坦面を構築したのか? S X W21鉄生産関連炉跡(第1段階)の上部には炭化物を多量に含む層が堆積し、その上に第2段階の炉跡が構築されている。

【第2段階】

炉跡は、半円形の谷部の山側に等高線に直交方向で歪な弧を描くように構築されている。第2段階の各炉跡のうち、S X W01・19鉄生産関連炉跡は、標高の高い位置にあり、さらに新しい段階として



鉄生産関連遺構 全体図

鉄生産関連遺構 変遷表

遺構	段階	位置	第1段階			第2段階			付属施設	性格	新旧関係
			a	b	c	a	b	c			
SXW01	上段								炉跡?	SW03の上部に構築	
SXW02	上段?								廃棄土坑	SXW04→SXW02	
SXW03	中段								炭窯跡?	SXW03→SXW04	
SXW04	中段								炭窯跡?	SXW03→SXW04	
SXW19	中段								炉跡?	SW06→SXW19	
SXW05	中段								鍛冶炉	SXW06→SXW05	
SXW06	中段								鍛冶炉	SXW06→SXW05	
SXW07	中段								廃棄土坑	SXW23→SXW07	
SXW08	中段							SX101	製鉄炉	SX104→SXW08	
SXW18	中段							SX101	廃滓坑		
SXW09	中段							SX102	炉跡	SXW17と同一遺構/ SXW10→SXW09	
SXW17	中段							SX102	廃棄坑	SXW17と同一遺構/ SXW10→SXW09/ SW08→SXW17	
SXW10	中段								炉跡?	SXW10→SXW09	
SXW15	中段								炉跡	SW07→SXW15	
SXW16	中段								炉跡	SW08→SXW16	
SXW21	下段							SX104	炉跡	SXW22→SXW21	
SXW22	下段								炉跡	SXW22→SXW21/ SXW24→SXW22	
SXW24	下段								炉跡	SXW24→SXW22	
SXW23	下段								炉跡	SXW23→SXW07	

- ※ 凡例① 切り合い関係のある遺構
- ※ 凡例② 前後関係の不明な遺構
- ※ 凡例③ 位置（上段・中段・下段）は、斜面地形の中での遺構の位置関係であるが、層位的にもこれに一致すると考えている。

第574図 古代の鉄生産関連遺構変遷図

細分できる可能性もある。なお、S X W08鉄生産関連炉跡は、谷部の掘削を開始し、上部の斜面性堆積物を除去した段階でやや不鮮明ながら輪郭を確認している。このことから3遺構（場合によっては、S X W03・04鉄生産関連炉跡なども含まれるか。）は、第3段階として分割できる可能性もある。

時期

鉄生産関連遺構から時期を特定できる遺物は出土していない。放射性炭素年代測定では、平安時代後期（11～12世紀）の測定値が得られている。また、炭窯跡と炉跡のそれぞれの測定値も、炭窯跡が旧く、炉跡が新しいという遺構の新旧関係を支持する測定値となっている。

（現況と遺構の立地・炉跡の検出・炉跡の構造・廃滓場・変遷：廣瀬時習）

（2）遺物

古代の遺物には、土師器・須恵器、土製品、金属製品、銭貨、鉄滓類、動物遺存体、自然遺物などがある。石器・石製品は出土事例が明確に認識できていない。以下、種別ごとに特徴を概観する。

a. 土師器・須恵器（第575～580図）

今回の調査での土師器・須恵器の出土地点は、ほぼ竪穴住居跡に限定されることから、竪穴住居跡出土の土師器・須恵器の年代観を検討するため、米田・佐藤 2016、宇部 2007・2013の分類を参考に検討した（註13）。第45表 土器組成表には、下記の分類を表記し、残存値の関係上細分できないものは不明（例・坏不明）とした。集成図には土師器・須恵器と一緒に出土した他の遺物も掲載した。

器種分類

坏：5つに分類した。

坏1 口縁部が内湾し、胴部が屈曲する底部が丸底のもの。口縁部と胴部の境には、外面に段や稜がつくられるが、内面には認められないものもある。（米田・佐藤編年の坏C、宇部編年の坏A）

坏2 半球形のもの。内外面をミガキ・黒色処理されるものは金属器模倣の可能性が指摘される。（米田・佐藤編年の坏E、宇部編年の坏D）

坏3 底部が平底もしくは平底風のもの。底部外面の調整には、ケズリがみられる（註14）。（米田・佐藤編年の坏F、宇部編年の坏E）

坏4 内外面無段の坏。厚みがあり、底から一気に積み上げて成形したもの。栗罎式土器の成形方法とは異なると考えられている。

坏5 ロクロ回転による調整技法のもの。（米田・佐藤編年の坏G）

坏1～4について、分類表では大型・中型・小型と分類し、坏1のみ米田・佐藤編年の鉢A、宇部編年の大型坏Aにあたるものを特大型（註15）として加えた。特大型は、口径20cm前後以上のもの、大型は16～19cm、中型は13～15cm、小型は12cm以下のものと基準を設定した。

椀：2つに分類した。

椀1 丸底もしくは平底風の体部から口縁部まで内湾するもの。体部上位に段や稜が認められる。

椀2 丸底もしくは平底風の体部から口縁部まで内湾するもの。体部上位に段や稜が認められない。

壺：2つに分類し、壺2を細分した。

壺1 器高が20cm未満のもの。

壺2 器高が20cm以上のもの。

壺2 a 胴部最大径が中～下位にもとめられるもの。（宇部編年の壺A）

壺2 b 胴部最大径が上位にもとめられる、いかり肩のもの。（宇部編年の壺B）

甕：3つに分類し、甕1を細分した。

甕 1 高さ25cm以上の大型のもの。

甕 1 a 胴部最大径が中～下位にもとめられる下膨れのもの。(米田・佐藤編年の甕 A 3、宇部編年の長胴甕 B・C)

甕 1 b 胴部最大径が上位にもとめられ、口縁端部が凹状に整形されるもの。東北北部の古墳時代後期から見られる甕の系譜と指摘されるもの。(米田・佐藤編年の甕 A 5、宇部編年の長胴甕 A)

甕 2 高さ18～25cm程度の中型のもの。(米田・佐藤編年の甕 B)

甕 3 高さ18cm未満の小型のもの。(米田・佐藤編年の甕 C)

甗：確認できた資料1点である。

甗 1 高さ18cm以上の大型、筒型無底のもの。(米田・佐藤編年の甗 A、宇部編年の甗 A)

高坏：未分類

一定量出土しているが、坏部～脚部の全体がわかる資料が無いため、分類しなかった。

時期

土師器・須恵器から検討した竪穴住居の帰属時期は、大きく3時期に分類することができる。

第Ⅰ期：7世紀前葉から7世紀中葉(米田・佐藤編年第3段階、宇部編年の凡そ1段階)

第Ⅱ期：7世紀末から8世紀前半(米田・佐藤編年第5・6段階前半、宇部編年3段階)

第Ⅲ期：9世紀末から10世紀前半(宇部 2013の8期に相当)

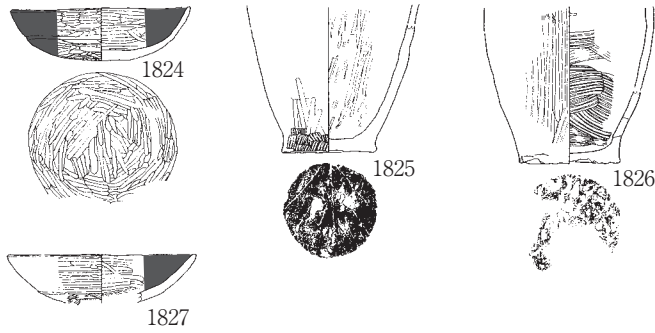
以下、主体となる第Ⅰ期と第Ⅱ期の様相について述べる。

【第Ⅰ期】(第581・582図)

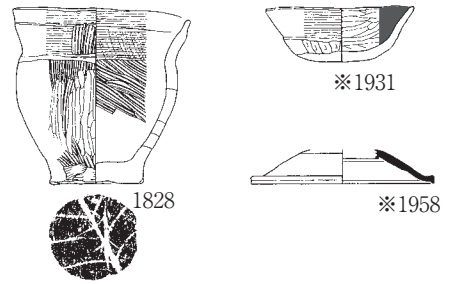
この時期に帰属するのは13棟(S I 09、10、21、25、29、33、42、48、50、52、63、87、105)である。細別器種は、坏1、坏2、坏4、高坏、椀、壺1、壺2 a、甕1 a、甕1 b、甕3、甗、ミニチュアが確認できる。坏は深めで、中型～大型、特大型のものが顕著である。壺は、最大径が下位にもとめられる壺2 a、甕は、最大径が上位にもとめられる甕1 bがある。甕の頸部付近に鋸歯状沈線文を持つものが多い。口唇部が平坦に作られ、端部が凹状に整形される等の共通点があるものは、破片資料でも甕1 bに分類した。赤彩が施される器種は、坏、高坏、椀、壺など種類が多く、横位の線状や格子状の線に塗られるものもある。いずれの器種も外面調整はミガキが多用されている。坏は、口縁が外反し開くものではなく、6世紀に遡ることはないと考えられる。また、口径を分類すると、特大・大(16cm以上)12点、中(13～15cm)12点、小(12cm以下)4点となり、小型坏の割合が少ない(註16)。S I 24竪穴住居跡出土の坏4は、栗圀式の坏の特徴である口縁部と体部の境に形成される段が無く、器厚が厚い。胎土も他の坏よりも緻密であることから、他の坏とは成形技法に違いがあると判断し、栗圀式土器成立より以前の系統である可能性があろう(註17)。壺は、S I 48竪穴住居跡等にみられる胴部下位が最大径となる下膨れの器形が特徴的である(註18)。甕は、甕1 bに分類した最大径が口縁にあり、頸部に段を有し底部の突き出しが強いものが特徴的である(註19)。S I 87竪穴住居跡出土の甕1905・1906・1907が、この特徴を有している。このうち1906・1907は甕1 bの中型・小型で、S I 87竪穴住居跡では、同じ器種の大中小が揃っている。甕の大中小が揃うのも、この時期の特徴といえる。また、口唇端部が凹状に整形されるものも複数認められる。須恵器の壺・瓶の破片も出土している。

第Ⅰ期で、比較的古い様相を示すものは、S I 21竪穴住居跡出土土器である。甗(1834)は、20cm以上の大型で古相を示す。坏4(1835・1836)は、無段で厚みがあり、底から一気に積み上げて成形したものと考えられ、栗圀土器様式の成形とは異なり、古墳時代から続く古い傾向を示す坏と考えられる。新しい様相を示すものは、S I 63竪穴住居跡出土土器である。甕(1888)は、口縁部破片であ

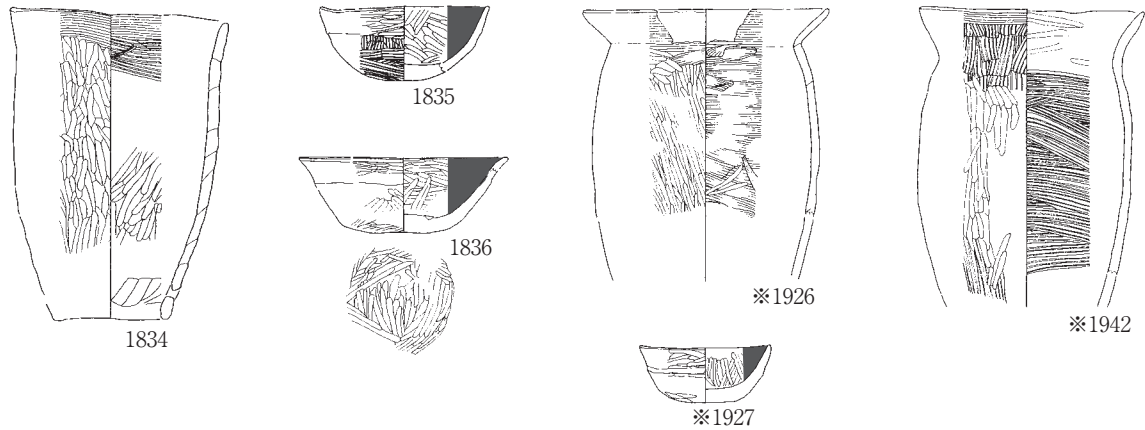
S I 09



S I 10



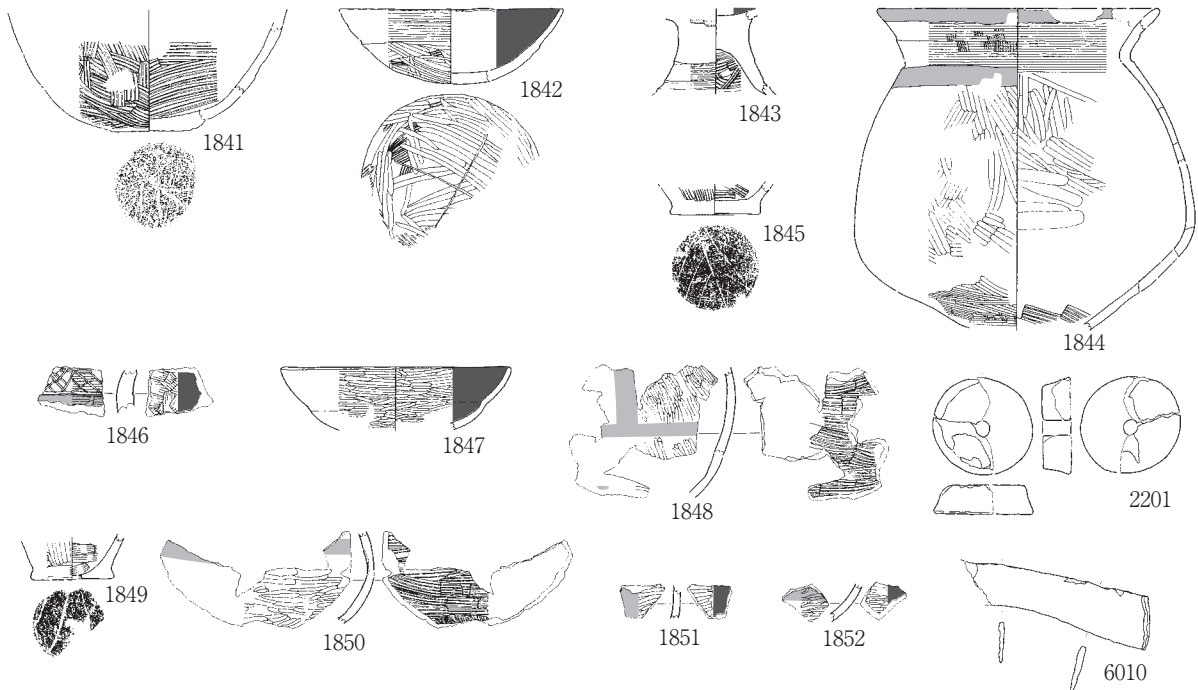
S I 21



S I 25



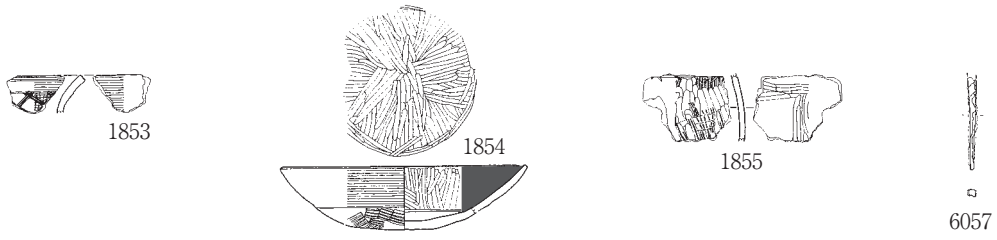
S I 29



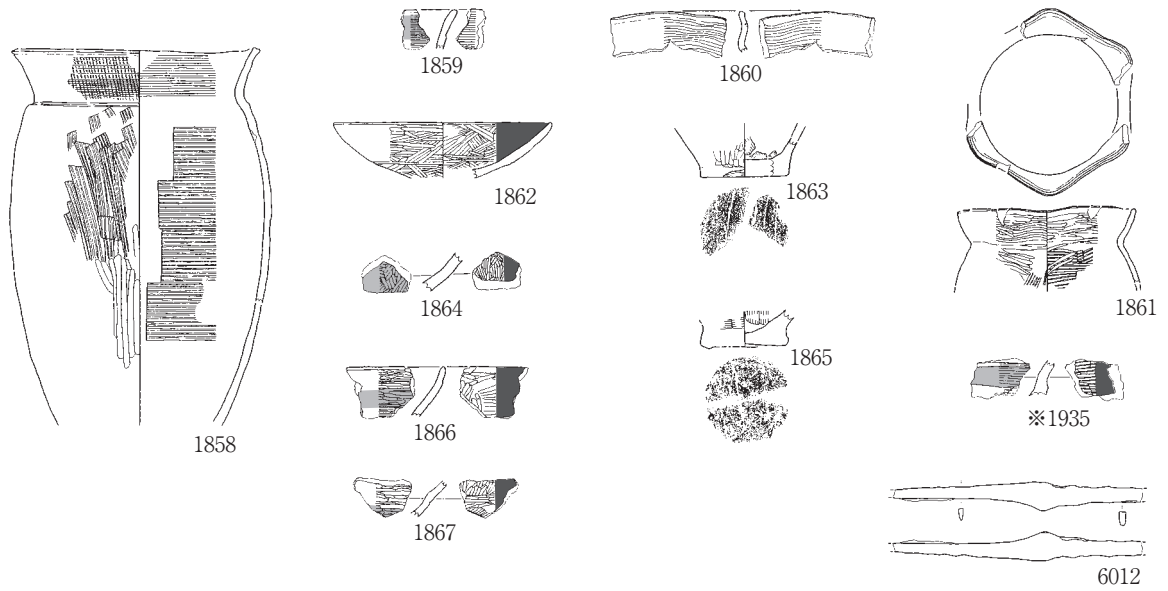
※参考資料
土師器・須恵器：1/6
土製品・金属製品：1/4

第575図 古代の土器集成図：第I期 (1/3)

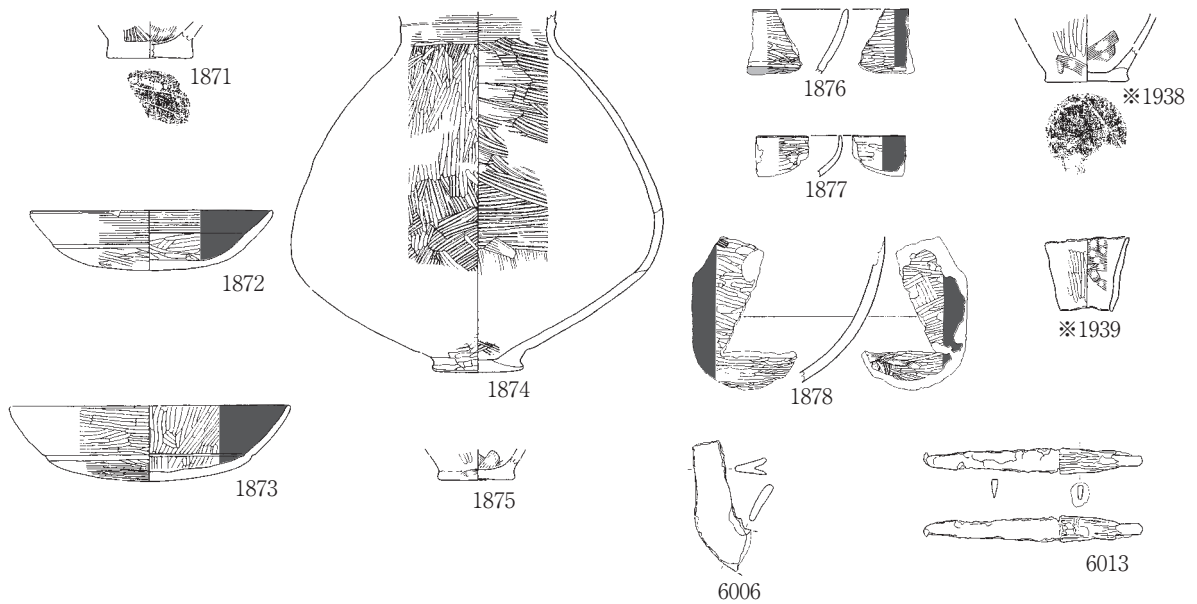
S | 33



S | 42



S | 48



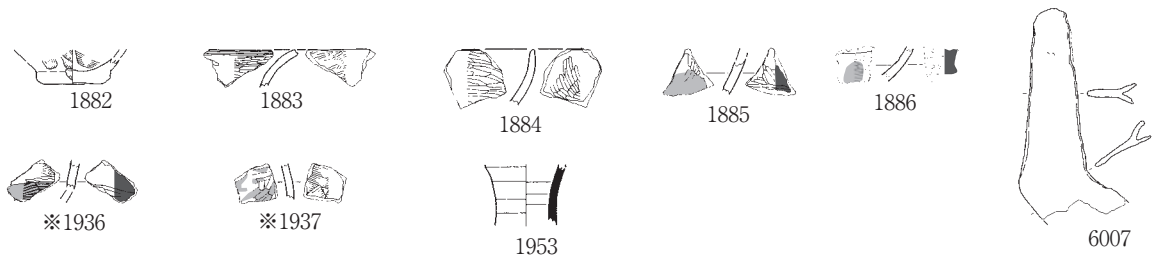
S | 50



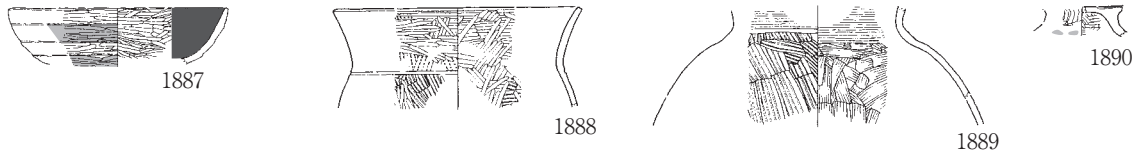
※参考資料
土師器・須恵器：1/6
土製品・金属製品：1/4

第576図 古代の土器集成図：第I期 (2/3)

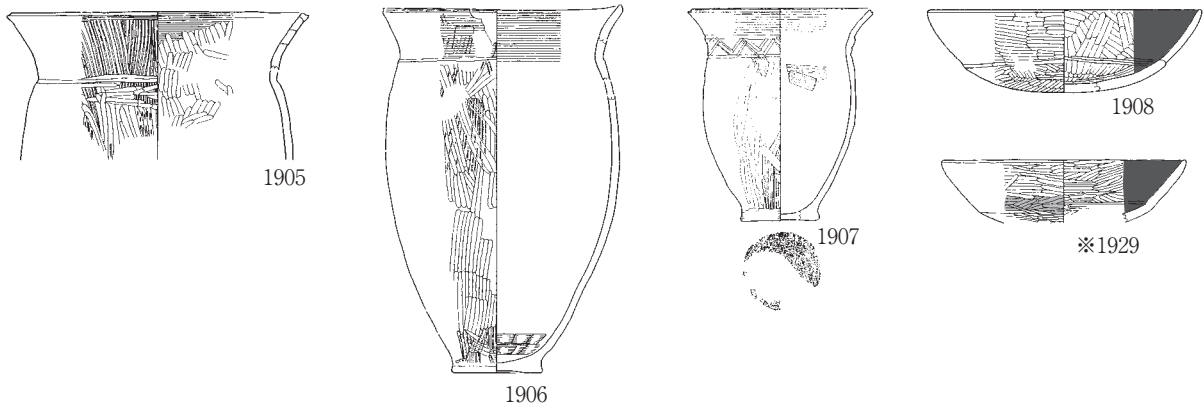
S | 52



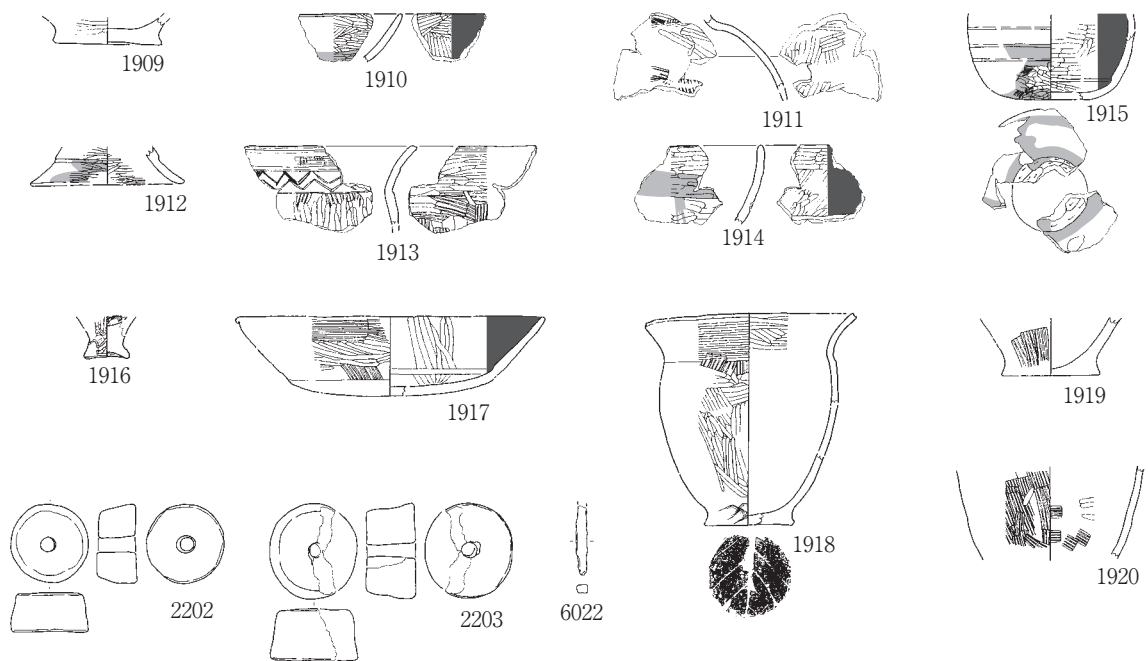
S | 63



S | 87



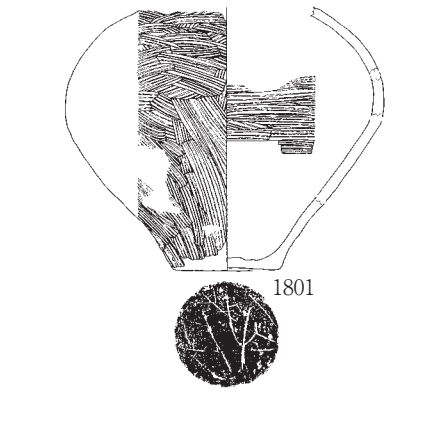
S | 105



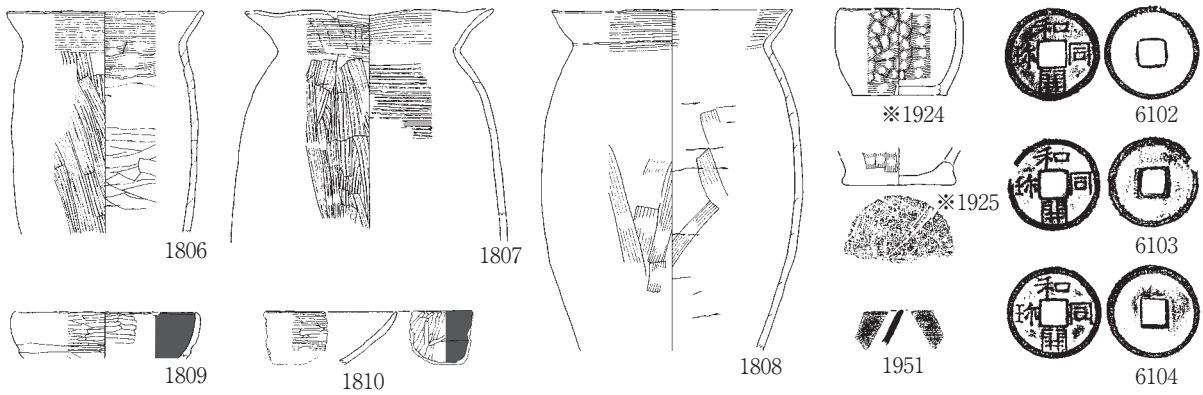
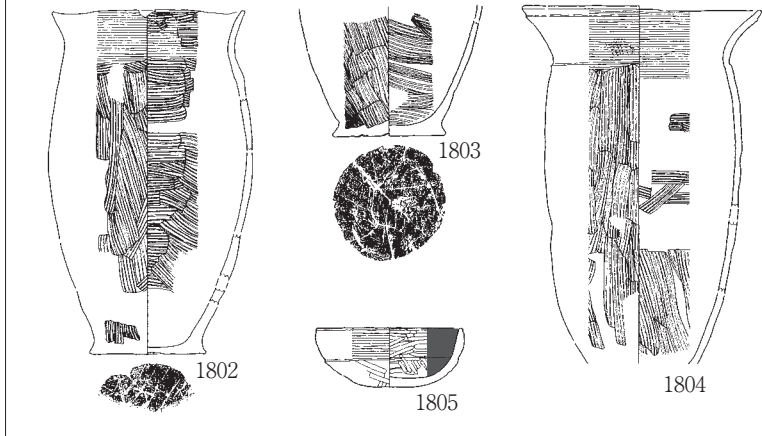
※参考資料
土師器・須恵器：1/6
土製品・金属製品：1/4

第577図 古代の土器集成図：第I期 (3/3)

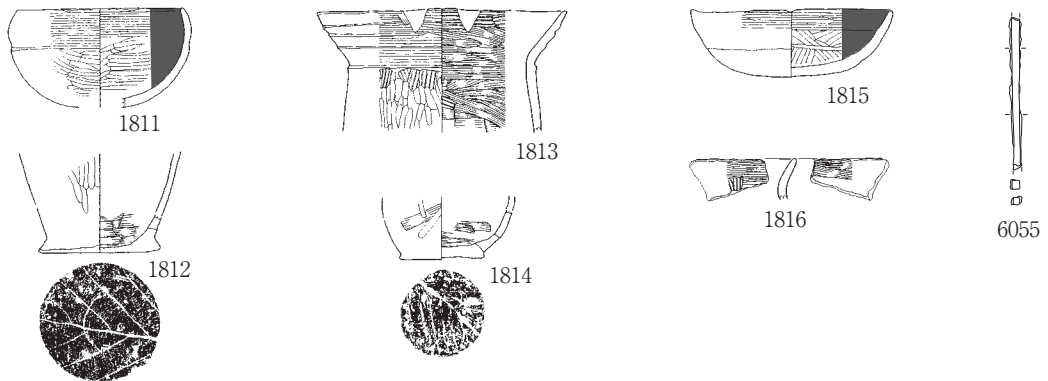
S I 02



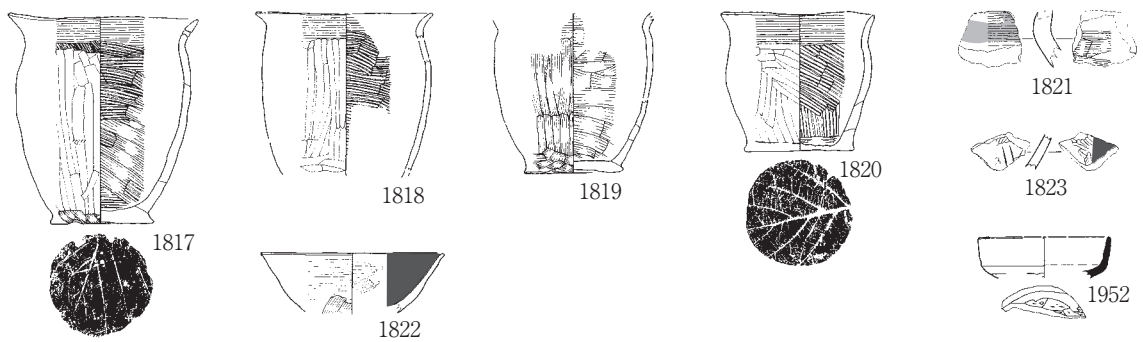
S I 04



S I 05



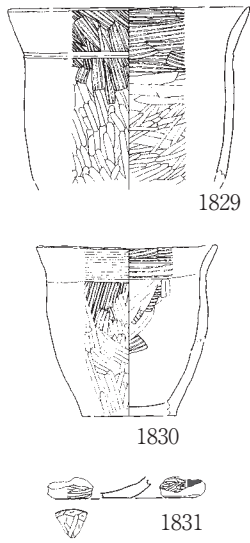
S I 06



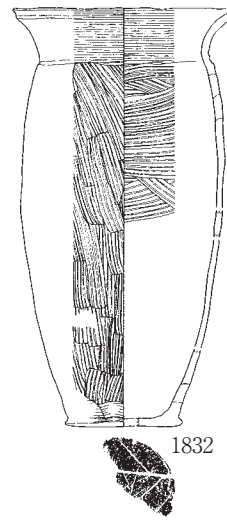
※参考資料
土師器・須恵器：1/6
土製品・金属製品：1/4
銭貨：1/2

第578図 古代の土器集成図：第Ⅱ期（1/2）

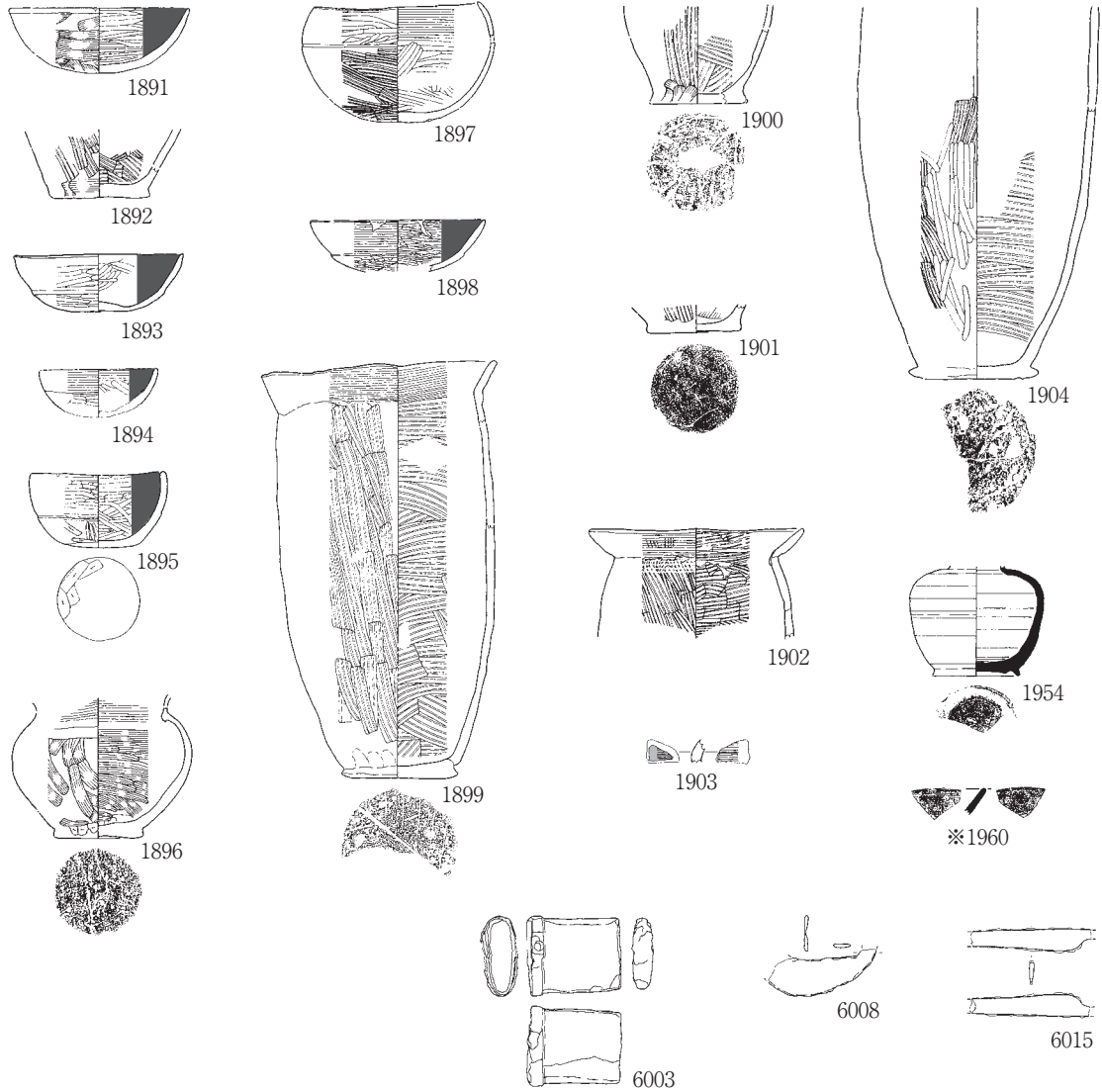
S I 11



S I 16

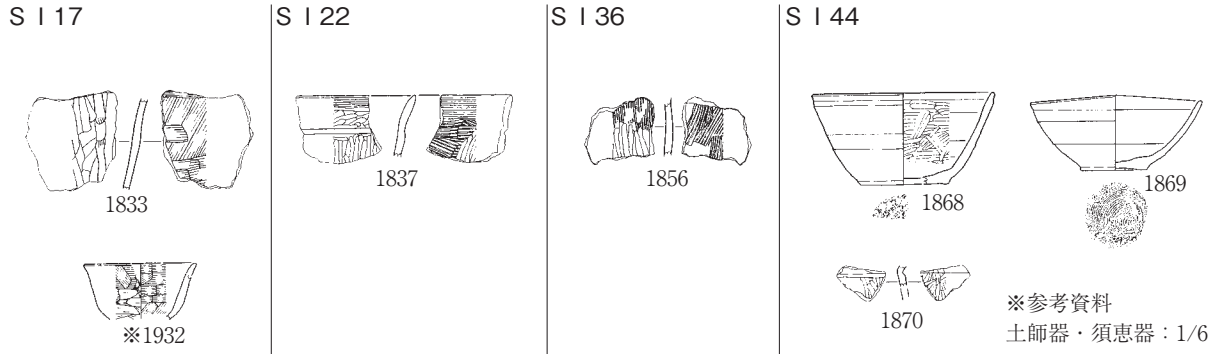


S I 14



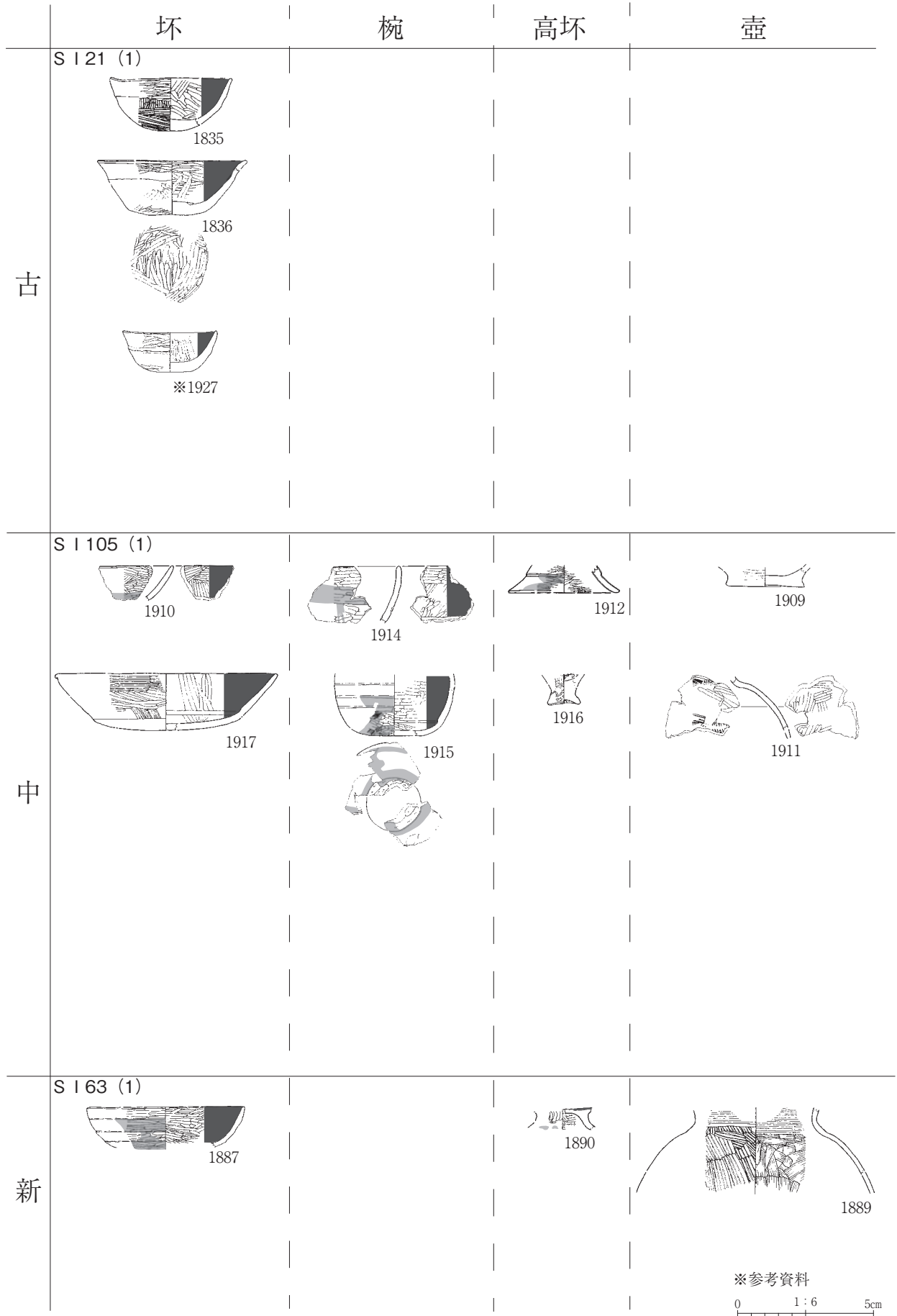
※参考資料
土師器・須恵器：1/6
土製品・金属製品：1/4

第579図 古代の土器集成図：第Ⅱ期 (2/2)

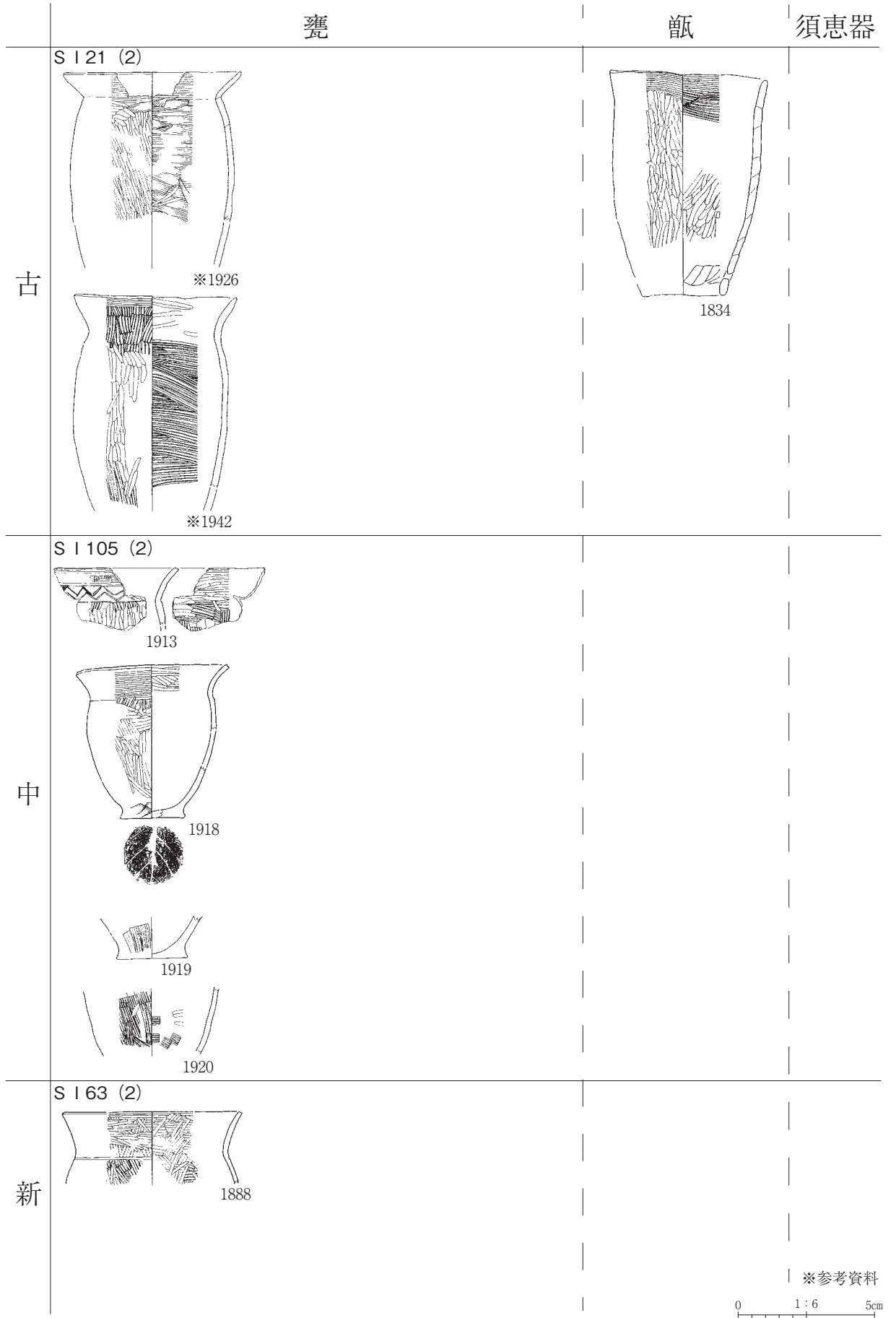


…第Ⅰ期 (7c 前葉～中葉)
 …第Ⅱ期 (7c 末～8c 前半)

第580図 古代の土器集成図：第Ⅲ期、遺構分布図（第Ⅰ期・第Ⅱ期）

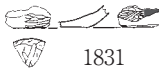
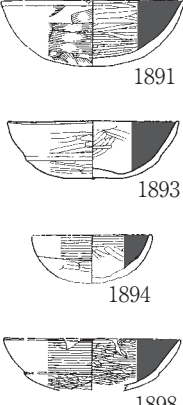
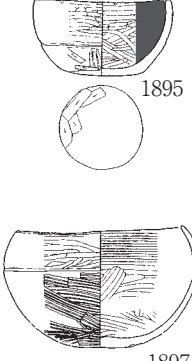
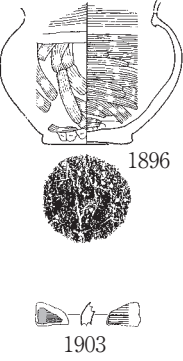
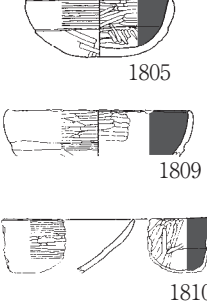


第581図 古代の土器変遷図：第I期 (1/2)



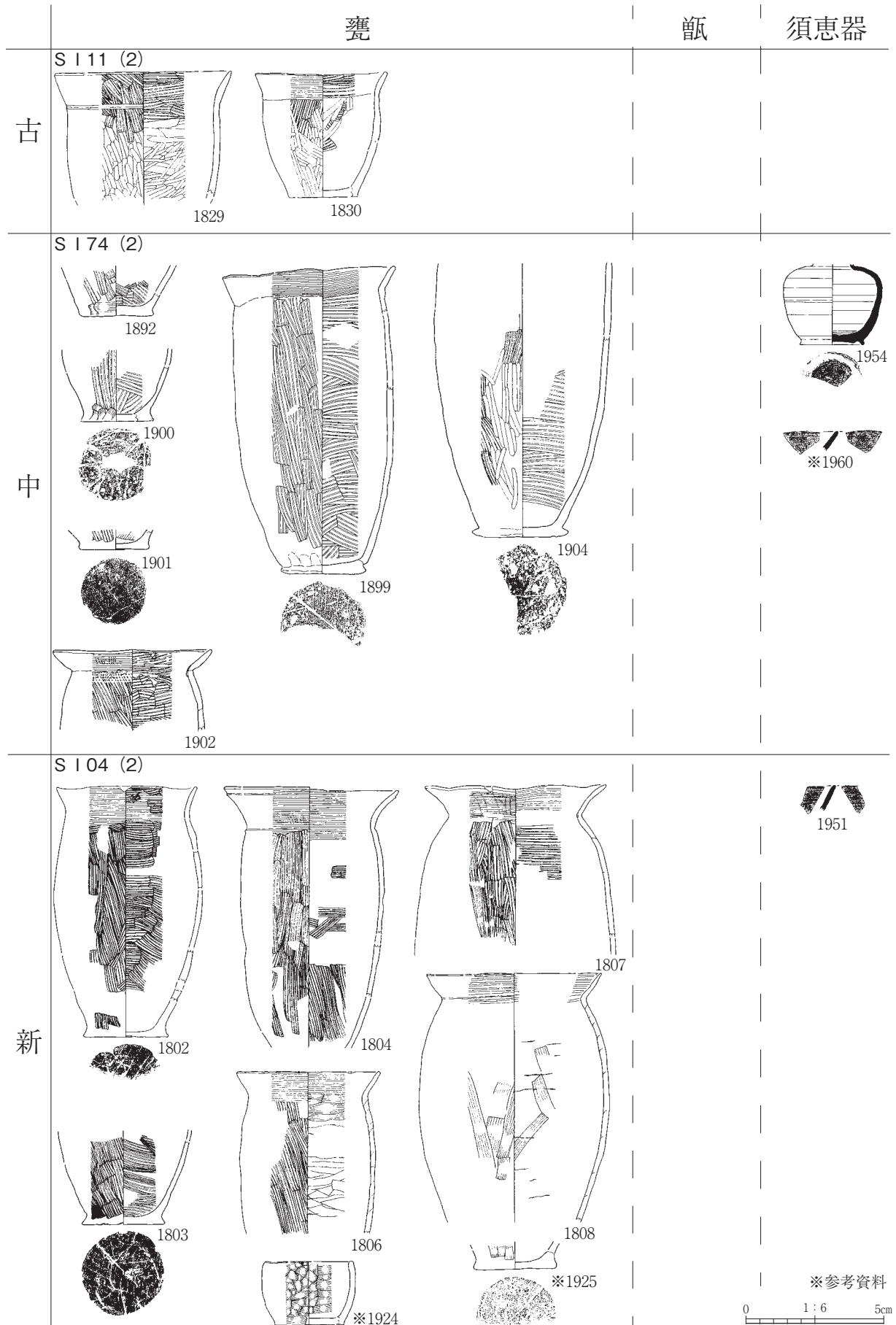
※参考資料
0 1:6 5cm

第582図 古代の土器変遷図：第I期 (2/2)

	坏	椀	高坏	壺
古	S 111 (1)  1831			
	S 174 (1) 			
中				
新	S 104 (1) 			

0 1 : 6 5cm

第583図 古代の土器変遷図：第Ⅱ期（1/2）



※参考資料
0 1:6 5cm

第584図 古代の土器変遷図：第Ⅱ期 (2/2)

るが、確認できる頸部の屈曲が弱く、新しい様相を示しているものと考えられる。

【第Ⅱ期】（第583・584図）

この時期に帰属するのは7棟（S I 02、04、05、06、11、16、74）である。細別器種は、坏1、坏2、坏3、椀、壺1、壺2 b、甕1 a、甕2、甕3が確認できる。坏は、第Ⅰ期に多く見られた大型のものは無く、中型と小型のものに限られる。平底風や平底のものも現れてくる。須恵器の碗・坏の破片も出土している。

第Ⅱ期で、比較的古い様相を示すものは、S I 11 竪穴住居跡出土資料である。甕（1829）の口縁部内外面はハケメで終わり、別の甕（1830）の調整にもハケメを残す。坏3（底部をケズリ調整している平底の坏）も存在する。新しい様相を示すのは、S I 04 竪穴住居跡出土資料である。坏1（1805）は平底風の底部になる小型坏である。甕（1802）の頸部の屈曲も弱くなっており、新しい様相を示すものと考えられる。

以上、第Ⅰ期と第Ⅱ期の器種の消長は、第Ⅰ期に存在する深めの特大型坏や大型坏が第Ⅱ期に消滅し、平底風もしくは平底の坏が現れる。また、第Ⅰ期に存在する甕1 b は、第Ⅱ期には確認できない。

第45表 古代の土器組成表

時期区分	遺構名	土師器																				甗	高坏	ミチユア	その他			
		坏													椀		壺			甕								
		1*			2			3			4			5	不明	1	2	1	2 a	2 b	不明					1 a	1 b	2
大	中	小	大	中	小	大	中	小	大	中	小	5	不明	1	2	1	2 a	2 b	不明	1 a	1 b	2	3	不明				
Ⅰ	SI09	2																						2				
	SI10																							1				
	SI21								1	1																1		
	SI25													1						1					1			
	SI29	1			1									2			2	1	1					1	1		1	
	SI33	1																							2			
	SI42	1												3						1		1			3			
	SI48	2												1	1			1							2			
	SI50				1																				2			
	SI52													1											2			
	SI63	1																1			1						1	
	SI87	1																				2		1			1	
	SI105	1												1	2		1			1				1	1	2	1	1
	Ⅱ	SI02																	1									
SI04			1	1										1							1				1			
SI05			1												1						2				4			
SI06														1						1				4				
SI11									1														1	1				
SI16																					1							
SI74			2			1	1			1						1	1			1	2				4			
Ⅲ	SI44												2											1				

赤彩 *坏1類のみに特大を含む
 鋸歯
 花卉状

鋸歯状沈線文を持つ土器

頸部に鋸歯状沈線文が認められる土器が複数ある。鋸歯状沈線文は、第Ⅰ期の甕1 bの頸部を中心に多くの器種で確認できるが、第Ⅱ期には確認できなくなる傾向がある（註20）。

赤彩土器

東北北部の古代赤彩土器は、近年、米田・高橋・河本ほか 2017・2018・2019により精力的に研究が進められた。その結果、彩色文様（横位や格子目文等）を持つ土器は、栗園土器様式文化圏の成立する7世紀前半から9世紀前葉に確認できるとしている。今回の沢田Ⅲ遺跡の事例では、横位太線の赤彩文

様を持つ土器1844は7世紀前半に位置付けられる。また赤色・赤褐色を主体とする赤彩土器の色調は、7世紀前半から8世紀前半に位置付けられると推測する(註21)。赤彩が塗布される器種は、第Ⅰ期は、壺を主体に坏、高坏、椀など様々な器種に認められる。S I 105竪穴住居跡出土の高坏No.1912・1914・1915も破片ながら、格子状の赤彩が施された高坏の可能性がある(註22)。第Ⅱ期では壺の破片にとどまり、詳細は不明である。また、これまで鋸歯状沈線文と赤彩土器が同一の竪穴住居跡から出土する事例も極めて少なく、本調査で複数の出土事例を提示できたことは貴重な成果である(註23)。第Ⅰ期のS I 29竪穴住居跡出土の壺1846は、一個体に鋸歯状沈線文と赤彩が認められる希少な資料である(註24)。

花卉状口縁の土器

第Ⅰ期と第Ⅱ期に相当する甕2点(1807・1861)が出土した。1807は口縁の端部を摘み出した形で、側面観は緩い波状を呈し、上面観は円形基調である。1861は口縁部が直線的に調整され、側面観は緩い波状を呈し、上面観は六角形状を呈する。2点の形状の差異が何に起因するものかは検討を要する。

(佐藤あゆみ)

b. 土製品

紡錘車と羽口がある。紡錘車はミガキ調整が施された厚手のもので、第Ⅰ期(7世紀前葉から中葉)のS I 29・105竪穴住居跡から出土した。鉄素材の紡錘車が確認できていない状況は、鉄製品が一般に普及し始める以前の7～8世紀前半頃の様相を反映していると推測される。羽口は、出土地点が鉄生産関連遺構群にはほぼ限定されることに特徴がある。本来の形状を検討することが可能な完形品も数例ある。

c. 金属製品

点数は少ない。留意しておきたいのは鞘尻と鉄鏃である。鞘尻は、第Ⅱ期(7世紀末から8世紀前半)のS I 74竪穴住居跡から出土した。鉄鏃は、第Ⅰ期(7世紀前葉から中葉)のS I 33竪穴住居跡を切っていたS K 99土坑から出土した。鉄鏃・鞘尻ともに沢田Ⅲ遺跡の西側約300m付近に位置し、古墳から多数の刀剣類が出土した房の沢Ⅳ遺跡(房の沢古墳群)との関連性を考える必要がある。

d. 銭貨

和銅開珎4点が出土した。うち3点はS I 04竪穴住居跡からの出土で、出土した土師器の年代観は、第Ⅱ期(7世紀末から8世紀前半)に位置付けられる。岩手県における和同開珎の出土事例は末期古墳や隣接する集落跡にはほぼ限定される傾向がある(註25)。沢田Ⅲ遺跡から出土した和銅開珎にも沢田Ⅲ遺跡の西側約300m付近に位置する房の沢Ⅳ遺跡(房の沢古墳群)との関連性があると推測せざるをえない。今後、注意深く検討していく余地がある(註26)。

e. 鉄生産関連遺構出土遺物

鉄生産に関連する遺物として、羽口、炉壁、鉄滓類、炭化材がある。多くは鉄生産関連炉跡・工房跡から出土している。このことは、限られた場所で鉄生産活動が行われていたことを示す。鉄滓類は、科学的分析結果と整理時の所見から、製錬・精錬・鍛練を行った結果得られたものと推測される。粒状滓や鍛造剥片の限定的な出土地点は、選択された場所で鍛冶作業が行われたことを示している。炭化材の樹種はクリとの鑑定結果は、燃料材の樹種として調和的な結果であった。

f. 動物遺存体、自然遺物

動物遺存体は、S I 48竪穴住居跡・S K 99土坑から出土した。古代の貝殻組成は、それ以前の二枚貝のアサリを主体とする貝殻組成のなかで、二枚貝のイガイの比率が高くなり、獣骨類では、ニホンジカ・海獣類の出現が見られることに特徴がある。コハクはS I 74竪穴住居跡から出土した。

3 中 世

(1) 遺 構

竪穴状遺構2棟、墓壇1基、貝層3箇所を確認した。S K I 02竪穴状遺構は壁際に柱穴を伴う中世の竪穴建物の形態で、S K I 05竪穴状遺構は、竪穴の形態が不明瞭であったが、出土遺物から時期を判断した。S X 10・11貝層は食物残渣（動物遺存体）が廃棄された土坑で、貝層は地形の変換点の低地南西端に点在する。

(2) 遺 物

中世陶器、銭貨、動物遺存体などがある。特にS K I 05竪穴状遺構から出土した12世紀代の陶器は、奥州藤原氏時代における岩手県沿岸部の様相を示す資料として貴重である。貝層は、いずれもアサリ主体で、キサゴ類の割合の高さ、ウマ・ウシの獣骨など、時代相を反映した組成を示している。

4 自然科学的分析・鑑定結果と調査の所見

本調査に係わり実施した自然科学的分析・鑑定結果と調査成果との係わりについて所見を述べる。

放射性炭素年代測定

27点（13年10点、14年12点、その他5点）の炭化材の年代測定を行った。結果を第46表に記す。

第46表 放射性炭素年代測定値一覧表

No.	測定番号	遺構名	層位	¹⁴ C年代	暦年代範囲
1	I AAA-130919	S K I 2土坑	7層	3970 ± 30yrBP	2575calBC-2457calBC (95.0%)
2	I AAA-130920	S I 03竪穴住居跡	6層	4140 ± 30yrBP	2874calBC-2622calBC (95.4%)
3	I AAA-130921	S W 01炭窯跡	3層	910 ± 20yrBP	1036calAD-1185calAD (95.4%)
4	I AAA-130922	S W 08炭窯跡	3層	870 ± 20yrBP	1151calAD-1222calAD (81.4%)
5	I AAA-130923	S X W 16鉄生産関連炉跡	—	910 ± 20yrBP	1034calAD-1181calAD (95.4%)
6	I AAA-132150	S I 1 13竪穴住居跡	ベルトB-B' 8層	4150 ± 30yrBP	2821calBC-2631calBC (76.8%)
7	I AAA-132151	S W 07炭窯跡	第5層	900 ± 20yrBP	1117calAD-1207calAD (49.0%)
8	I AAA-132152	S X W 08鉄生産関連炉跡	炉跡内部	860 ± 20yrBP	1154calAD-1250calAD (94.0%)
9	I AAA-132153	S X W 21鉄生産関連炉跡	下層炉跡②	840 ± 20yrBP	1161calAD-1255calAD (95.4%)
10	I AAA-132154	S X W 22鉄生産関連炉跡	基礎構造内	820 ± 20yrBP	1170calAD-1263calAD (95.4%)
11	I AAA-142404	S I 30竪穴住居跡	P 1土器内	3990 ± 30yrBP	2573calBC-2467calBC (95.4%)
12	I AAA-142405	S I 35竪穴住居跡	ベルトA-A' 埋土5b層	4040 ± 30yrBP	2622calBC-2476calBC (95.4%)
13	I AAA-142406	S I 40竪穴住居跡	埋土中位	3950 ± 30yrBP	2498calBC-2393calBC (63.6%)
14	I AAA-142407	S I 48竪穴住居跡	埋土中位、貝層A	1880 ± 20yrBP	439calAD-595calAD (95.4%)
15	I AAA-142408	S I 52竪穴住居跡	埋土3層No.5	1360 ± 20yrBP	638calAD-685calAD (95.4%)
16	I AAA-142409	S I 60竪穴住居跡	床面直上	3930 ± 30yrBP	2489calBC-2334calBC (91.7%)
17	I AAA-142410	S I 75竪穴住居跡	埋土6層	4020 ± 30yrBP	2581calBC-2471calBC (95.4%)
18	I AAA-142411	S I 103竪穴住居跡	炭化材1	4040 ± 30yrBP	2625calBC-2476calBC (95.4%)
19	I AAA-142412	S I 104竪穴住居跡	石囲炉西側	3930 ± 30yrBP	2487calBC-2336calBC (93.0%)
20	I AAA-142413	S X 10貝層	ベルトA-A' 埋土4層	350 ± 20yrBP	1539calAD-1635calAD (55.3%)
21	I AAA-142414	S X 11貝層	北ベルト6層	1070 ± 20yrBP	1275calAD-1389calAD (95.4%)
22	I AAA-142415	S X I 05鉄生産関連工房跡	ベルトB-B' 埋土2層	950 ± 20yrBP	1065calAD-1154calAD (67.5%)
23	I AAA-161241	S I 04竪穴住居跡	床面直上	1360 ± 20yrBP	641calAD-685calAD (95.4%)
24	I AAA-161242	S I 21竪穴住居跡	埋土下位	870 ± 20yrBP	1151calAD-1220calAD (80.8%)
25	I AAA-161243	S I 25竪穴住居跡	煙道埋土	1360 ± 20yrBP	642calAD-686calAD (95.4%)
26	I AAA-161244	S I 29竪穴住居跡	埋土上位	690 ± 20yrBP	1270calAD-1306calAD (75.9%)
27	I AAA-161245	S I 105竪穴住居跡	埋土	1460 ± 20yrBP	565calAD-645calAD (95.4%)

縄文時代の竪穴住居跡9棟、土坑1基は、おおむね縄文時代中期の測定値が得られており、出土遺物の年代観と大きな齟齬がない。古代の竪穴住居跡7棟のうち、S I 04・25・52竪穴住居跡は、古墳時代後半の測定値が出ており、出土遺物の年代観とおおむね調和的である。S I 48・105竪穴住居跡はやや古い測定値、S I 21・29竪穴住居跡は平安時代後半から中世の測定値で、出土遺物の年代観とは大きな隔たりがでた。古代の鉄生産関連炉跡4基、炭窯跡3基、工房跡1棟は、平安時代後半の測定値が得られた。S X 10貝層は、16世紀代を中心とした戦国時代から江戸時代初期、S X 11貝層は、13世紀後半から14世紀代の鎌倉時代後半以降、南北朝時代の測定値が得られた。

火山灰

1点分析した。十和田中堰テフラと認識して採取したが、鑑定の結果、十和田南部テフラの可能性が高いとの結果を得た。十和田火山起源の降下火山灰であることは支持できるが、現地調査の所見としては、十和田中堰テフラの可能性を考えておきたい。

鉄滓類

22点(13年11点、14年11点)分析した。鉄生産関連炉跡(S X W 09、09・17、16、21、22)の鉄滓類は、すべて製錬工程でできたもので、製錬炉で鉄素材を生産し、鍛冶炉に供給していたと考えられている。鉄生産関連工房跡(S X I 05)・炉跡(S X W 08)の鉄滓類は、精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓に分けられ、近隣で生産された鉄素材を使用し、鍛冶炉で精錬鍛冶、鍛錬鍛冶が行われていたと考えられている。遺構・遺物の調査から想定された所見と分析結果から得られた所見は調和的である。

動物遺存体

縄文時代・古代・中世以降の各時代の動物遺存体を分析した。確認された種類は次のとおりである。ウニ綱1種類、多毛綱1種類、腹足綱37種類、二枚貝綱31種類、顎脚綱2種類、軟骨綱1種類、軟骨魚綱1種類、硬骨魚綱27種類、両生綱1種類、爬虫綱1種類、鳥綱2種類、獣類14種類である。以下、貝殻・魚骨・獣骨などの食物残滓から指摘された各時代の様相を概観する。縄文時代の貝類組成は、アサリ主体でウミニナの割合が高い。獣骨ではイヌの骨を確認した。古代の貝殻組成は、アサリ主体でイガイの占める割合が高く、獣骨ではウマ、イノシシ、ニホンジカ、海獣のアシカ類などを確認した。中世の貝殻組成は、アサリ・イソシジミなどの他、キサゴ類の占める割合が高くなる。分析結果は各時期の特徴が抽出されており、貴重な資料となった。

植物遺存体

縄文時代中期の植物遺存体を確認した。土坑(S K 12)出土のトチノキは、表面に種皮が付いた完形の個体も確認され、食用前の種皮が付いた完形の状態で被熱・炭化し、炭化後に割れて破片となった試料と推測された。乾燥種子を炭化させたとの指摘である。竪穴住居跡(S I 75)出土のクリは、完形・略完形の個体が多く、表面に果皮が残る個体、果皮片も多く確認されることから食用前の乾燥した完形果実の状態で火を受けた試料である。クリの大きさは、これまでの縄文時代中期の遺跡の事例と比較し、同程度もしくは小さい傾向が指摘された。今回のまとまった個体数の計測は重要な考古学的資料であり、当該時期の食料事情を検討するうえで貴重な資料である。

炭化材樹種同定

20点(13年10点、14年10点)の樹種同定を行った。縄文時代中期の竪穴住居跡2棟、古代の鉄生産関連炉跡5基、工房跡1棟、炭窯跡5基から出土した炭化材で、いずれも樹種はクリとの結果である。竪穴住居跡出土炭化材は建築部材として用途が考えられる。工房跡・鉄生産関連炉跡・炭窯跡出土の炭化材は鉄生産を行った際の燃料材としての用途が考えられる。意図的にクリが選択され、利用されており、当該時期の遺跡周辺環境を検討するうえで有益な資料となった。

琥珀

1点分析した。古代の竪穴住居跡から出土である。産地同定を行った結果、久慈市及びいわき市産の可能性が高く、出土地の地理的及び時代的な要素を考慮すると、久慈市産の可能性が高いとされた。

黒曜石

5点分析した。古代の竪穴住居跡4点、遺構外1点である。産地同定を行った結果、北上山地、北海道豊浦地区、北海道赤井川地区に由来するものとの結果が出ている。

アスファルト

2点分析した。縄文時代中期の事例で、物質はアスファルトと同定された。産地は、津軽半島から秋田県北部の油産域のアスファルトで、岩手県北部沿岸域まで、もたらされていた可能性が指摘されている。

土器の胎土分析

縄文時代・古代の土器86点の胎土分析を行った。縄文土器では、前期前葉（大木2式）の胎土に植物質の存在が顕著で、繊維の混入度合いの高さが指摘された。中期後葉（大木9式）の胎土には土器片を含むことが確認されている。古代の土器は、縄文土器に比べて含まれる砂粒のバリエーションが少なく、赤彩土器と非赤彩土器では、胎土の材料が異なっていた可能性が指摘されている。

5 まとめ

沢田Ⅲ遺跡は、縄文時代・古代・中世の複合遺跡である。以下、時代ごとに調査成果をまとめる。

縄文時代 竪穴住居跡、土坑、炉跡・焼土遺構などを確認した。

[前期] 低地部に大型の竪穴住居からなる集落が形成される。低地部より標高の高い谷部に遺物包含層が形成される。出土した土器は、前葉から末葉で、前期前葉と後葉の出土量が多い。

[中期] 低地部に竪穴住居跡、尾根部から南斜面に貯蔵穴がつくられ、集落が形成される。時期は中期後葉から末葉を主体とし、中期末葉に拠点集落の様相を呈する。出土した土器は、中期前葉から後葉にかけて少しずつ量が増え、中期末葉で最も多くなる。

古代 竪穴住居跡、土坑、鉄生産関連遺構群（工房跡・炉跡、炭窯跡）を確認した。

[古墳時代後期から奈良時代] 7世紀前葉から中葉（第Ⅰ期）、7世紀末から8世紀前半（第Ⅱ期）の大きく2時期に低地部と谷部に集落が形成される。第Ⅰ期の土器には、鋸歯状沈線文を伴う土器が含まれる。赤彩土器も多くの器種で確認されており、赤彩土器の出現期の様相を検討する上で貴重である。第Ⅱ期の土器では、和銅開珎が出土した竪穴住居跡がある。

[平安時代] 9世紀に小規模な集落が形成される。平安時代後半には、北東谷部の狭い範囲で密集して鉄生産が行われていた。工房跡・炉跡・炭窯跡から構成され、製錬・精錬・鍛錬の工程を行っていたと推測される。時期は放射性炭素年代測定から11～12世紀と推測される。また、同時期の居住域は沢田Ⅲ遺跡以外の地点にあった可能性がある。

中世 竪穴状遺構、墓壙、貝層などを確認した。

個別の遺構とともに12世紀代の陶器が出土したことは注目される（註27）。古代の鉄生産関連遺構として整理した遺構群で実施した放射性炭素年代測定で、平安時代後半11～12世紀代の測定値が提示されていることにも留意しておきたい（註28）。なお、今ひとつ具体的ではないが、出土遺物や放射性炭素年代測定値から中世後半から近世にかけても何らかの営みあったと推測される。

遺跡の立地と周辺環境

今回の調査で豊富な動物遺存体や植物遺存体を確認した。現在の海岸線から北西側に直線距離約



山田町の地形図

周辺の遺跡分布※3



山田町 番号※1	山田町 コード※2	岩手県 遺跡台帳 コード※3	遺跡名	調査年次 (西暦)	調査機関
46	II D-4238	L G 94-0025	間木戸Ⅲ	—	—
47	II D-4218	L G 94-0005	間木戸Ⅰ	2013・2014 2015	県埋文
48	II D-4219	L G 84-2096	間木戸Ⅳ	2013	町教委
49	II D-4320	L G 94-0007	間木戸Ⅱ	2013	県埋文
50	II D-4301	L G 84-2098	間木戸Ⅴ	2013	県埋文
51	II D-4302	L G 84-2089	間木戸Ⅵ	—	—
54	II D-4243	L G 94-0020	沢田Ⅵ	—	—
55	II D-4255	L G 94-0032	沢田Ⅰ	1994・1995 1996・1997 1999	県埋文
56	II D-4256	L G 94-0033	沢田Ⅱ	1996	県埋文
57	II D-4268	L G 94-0054	沢田Ⅳ	—	—
58	II D-4247	L G 94-0024	沢田Ⅲ	2013・2014	県埋文
63	II D-4254	L G 94-0050	房の沢Ⅳ	1996・1997 2015	県埋文

※1：山田町教育委員会 2002
 ※2：山田町教育委員会 2002
 ※3：R2岩手県遺跡情報検索システムより

第585図 周辺の地形と遺跡

0.8kmに位置する沢田Ⅲ遺跡は、北西から延びる山稜と南側から広がる低地の境界付近に位置し、背後に広がる北側の山と前面に広がる南側の海から、豊富な「山の幸」「海の幸」を入手できる地点であった。そのことが大規模な集落が形成される基盤になったと推測される。

周辺の遺跡のなかで（第585図）

周辺遺跡の各時代の調査成果を踏まえ、総括することが今後の課題である。縄文時代では、沢田Ⅰ・Ⅱ遺跡、間木戸Ⅰ・Ⅱ遺跡など近隣遺跡の調査成果でも、竪穴住居跡や貯蔵穴の立地に共通性が認められる。広い台地や低地が少なく、山稜が低地に迫る岩手県沿岸部における土地利用の在り方を示していると推測される。また、各遺跡の時期ごとの出土遺物の量に多寡があり、時期により拠点となる集落が移動していた可能性がある。古代では、近接する房の沢Ⅳ遺跡（房の沢古墳群）の調査成果を踏まえ、集落と古墳との関係を検討していく必要がある。中世では、12世紀の陶器が出土している。これまで岩手県沿岸部で確認されてきた同時期の遺構・遺物と併せて検討していく必要がある。

謝辞

本報告書は、2箇年の調査と8年間の整理の成果をまとめたものである。この間、調査では、（公財）大阪府文化財センターの外向職員に支援いただき、整理では、様々な観点から多くの方々のご指導を得る機会を得た。ご多忙のなか助言を惜しまれなかった諸先生・諸先輩方に改めてお礼申し上げたい。また、真夏日の続く暑い夏から最低気温が氷点下となる寒い冬まで、安全に配慮しながら調査に従事していただいた地元の野外作業員の方々、野外調査との並行整理が続き、指示・確認が覚束ないなか的確・迅速に整理を進めていただいた室内作業員の方々に厚くお礼申し上げたい。

註

- (1) 星 2002。沢田Ⅰ遺跡の竪穴住居跡における十和田中振テフラの堆積状況と出土した土器型式の関係を検討している。
- (2) 高田 2005。同書「焼失住居跡を発見した西ムラ」pp44～48、「土屋根住居の復元実見」pp59～69。
- (3) 高田 2005。同書「竪穴住居の機能」pp50～51。
- (4) 尾根から南斜面につくられた土坑群は、基盤のⅣ層マサ土を掘り込んで壁・底面がつくられている。そのことから、Ⅲ層黄褐色粘土層を掘り込んでつくられた竪穴住居跡と比べて、降雨時の水捌けが格段に良いことを調査時に幾度も確認した。
- (5) 土坑からトチがまとも出土した事例に八幡平市（旧安代町）赤坂田Ⅰ遺跡KⅣa5ピットがある。規模は、開口部145×110cm、底部150×145cm、深さ95cm、形状は、平面形：円形、断面形：フラスコ、埋土の状態は、上位・中位は黒褐色土で炭化物を少量含む。下位の上層は褐色土であるが下層である底面付近は明赤褐色土で焼土と炭化物を多量に含んでいる。説明には、底面は焼成を受けておりそれは底部付近の壁面にまで及んでいた。底面上には多量のトチの実が出土した。（中略）トチの実の放射性炭素年代測定値は、埋土下位のもの2,650±80yBP、底面上のもの2,670±90yBPの値である。V まとめ ピットに「KⅣa5ピットの底面上に多量の炭化したトチの実が発見された。その量は面積およそ1.5㎡のピット底面に厚さ5cm前後である。このピットの底面は焼成を受けており、それは底面近くの壁面にまで及んでいる。このことからトチの実はこのピットに貯蔵されていて、蒸し焼き状態になったものと考えられる。」（pp119）とある。SK12土坑の壁・底面に明確な焼成痕は確認できなかったが、焼成を受けても諸条件で焼成の痕跡が遺らない場合もあるのだろうか。
- (6) 同様の土器は山田町ク井遺跡でも出土している。また、大木2式に見られる単軸絡条体第5類（網目状撚糸文）の地紋は、大木5式の地紋でも多用されており、大木2式と大木5式がともに出土している場合は識別が難しい。本報告書では、胎土への繊維の混入のほか、絡条体の回転方向の差異（大木2式は横回転・大木5式は縦回転）を識別の目安の一つとした。
- (7) 早瀬 2008、七ヶ浜町歴史資料館 2018では、大木1式の地紋の特徴に末端・側面環付のループ文、斜行縄文、羽状縄文、組紐を挙げる。大木2式では組紐に触れていない。星 2002では、沢田Ⅰ遺跡RA501出土土器について、0段多条の原体使用、非結束羽状縄文、組縄縄文、繊維量の多さから崎山貝塚第Ⅰ群相当（大木1式相当）と位置付けている。
- (8) 単軸絡条体第1類（撚糸文）、同1A類（木目状撚糸文）、同5・6類（網目状撚糸文）は、円筒下層c・d式の胴部に多用される地紋である。大木5式の撚糸文を円筒下層c・d式の撚糸文と比べると、緻密さはないが、種類に共通性が認められ、岩手県北部域の大木5式の撚糸文は、同時期の円筒下層式土器の影響を受けた可能性があるのではと推測する。
- (9) 大沼 2008では、オオパコ回転文の出土遺跡として北海道を中心とした縄文時代後期・晩期16事例、本州の福島県から長野県までの弥生時代25事例が提示されている。岩手県内で縄文時代前期後半から末葉に確認されている諸事例（盛岡市上八木田Ⅰ遺跡、西和賀町（旧湯田町）峠山牧場Ⅰ遺跡B地区、同清水ヶ野遺跡など）には触れていない。
- (10) 沢田Ⅲ遺跡の中期末葉のSⅠ88・104竪穴住居跡から出土した口縁から胴部下半まで残存する立体土器の内訳は、精製土器5点、粗製土器13点である。SⅠ115竪穴住居跡では、精製土器2点、粗製土器4点である。参考までに大船渡市長谷堂貝塚（平成14年度調査）で土器埋設炉に使用された土器33点の内訳は、精製土器13点、粗製土器20点である。

- (11) 礫の側縁を使用する磨石(横断面三角形のいわゆる特殊磨石、長谷堂貝塚発掘調査報告書 2020は、凡例で磨面と特殊磨面・摺面を分け、観察表ではスリ面と敲打面と記載)は、側縁部分に“すりつぶし(磨り潰し)”の痕跡が残るスリ石(岩手県立博物館 2005)で、峠山牧場I遺跡B地区(擦面と記載)など前期後半から末葉の大木式土器圏の遺跡に顕著な出土事例がある。また、長谷堂貝塚 2020は、頂端に敲打面を持つ小型棒状敲石を敲磨器類と独立させ、小型棒状磨石と分類している。
- (12) 中期末葉の小型石棒の出土事例として、大船渡市長谷堂貝塚、盛岡市湯沢遺跡、一関市清水遺跡に事例がある。
- (13) 7・8世紀の東北・北海道の土器研究は、『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』(辻編 2007)で、各地域の土器の比較・検討が行われている。本遺跡の位置する岩手県沿岸は、岩手県南部から宮城県北沿岸を北端のラインとする「栗岡土器様式圏」に対して、「北部型栗岡土器様式圏」として位置付けられている。その後、東日本大震災後の復興関連調査で蓄積された岩手県沿岸部の資料を詳細に検討した米田・佐藤 2016は、「栗岡土器様式圏」は岩手県沿岸中部地域まで拡がると捉えた。その他、三陸沿岸北部・馬淵川流域の土器を対象とした論考に宇部 2007・2013がある。
- (14) 米田・佐藤 2016では、坏の「底部外面のケズリは底面から底面と体部の立ち上がりの角までを行っているものが多いことから、同時期の須恵器坏の底部調整の回転ヘラケズリの模倣の可能性はある。」と指摘している。
- (15) 米田・佐藤 2016、佐藤 2007で、これまで鉢に分類しているものについて、本稿では坏の特大型とした。
- (16) 米田・佐藤 2016では、小型坏について7世紀中葉以前は客体的であるとしている。
- (17) 類似資料として、野田村蒲沢遺跡5号堅穴住居跡出土資料が挙げられる。無段の坏で厚みがあり、内外面のミガキが顕著である。共伴する甕も甕1bの特徴をもつ。時期は7世紀前半と報告されている。
- (18) 福島 2019では、7～8世紀前葉の栗岡式土器の甕や壺の胴部張り出し部分で輪積み上げの休止を挟む製作技法の特徴は、胴部張り出し部の調整方向の変化として表れるとしている。沢田Ⅲ遺跡出土の壺にも同様の調整の変化が確認できる。
- (19) 宇部 2007では、この分類中に頸部に段をもたない例が「三陸北部に目立つ」とする。沢田Ⅲ遺跡の資料でも認められる。
- (20) 伊藤 1990は、東北北部から出土した沈線文土器(本稿の鋸歯状沈線文)を集成し、7世紀代に岩手県北部から青森県東部付近で成立したと考察している。宇部 2007では、6世紀後葉から7世紀前葉に出現するとしている。
- (21) 米田・高橋・河本 2019では、赤彩土器の色調観察から、4～6世紀は赤色主体、7～8世紀前半は赤褐色主体、8世紀後半以降は赤褐色～明赤褐色主体で、古い様相の深みのある赤色から、時期が新しくなると、明るくなる傾向を指摘している。本調査で出土した赤彩土器の色調は、赤色・赤褐色が主体で、8世紀前半以前の傾向を示すものと推測される。
- (22) 北上市立埋蔵文化財センター 2013。五条丸支群第6次調査S Z 056出土掲載No.29の椀状に大きく内湾する高坏は、外面に格子状に赤彩が施されている。時期は8世紀と位置付けられている。器種・器形・赤彩の様子が類似する資料である。
- (23) 同一の遺構から赤彩土器と鋸歯状沈線文が施された土器が共伴した事例は、房の沢Ⅳ遺跡R T 09古墳でも認められる。
- (24) 野田村古館山遺跡の第2号堅穴住居跡からは鋸歯状沈線文と赤彩の両方が施された壺掲載No.24が出土している。報告書では「内外面全面朱塗り」と記されるが、土器を実見したところ、口縁の端部を横位に塗布したものであった。
- (25) 井上 2000。集成時点で岩手県では17点出土している。内陸部の盛岡市太田蝦夷森古墳や花巻市熊堂古墳群、沿岸部の宮古市長根Ⅰ遺跡など末期古墳のほか、北上市江釣子古墳群に隣接する猫谷地遺跡の堅穴住居跡からも出土しており、古墳やその周辺の集落から出土する傾向が認められる。なお房の沢Ⅳ遺跡(房の沢古墳群)の調査で和同開珎は出土していない。
- (26) 房の沢Ⅳ遺跡(房の沢古墳群)の年代観は、一部7世紀に入るが、おおむね8世紀代と報告されている(佐藤 2005)。出土した土師器の特徴は、鋸歯状沈線文を持つ甕1b、赤彩土器など沢田Ⅲ遺跡の土師器と共通する点が多いが、その年代観を詳細に検討することは本報告書の範疇を超える。房の沢Ⅳ遺跡(房の沢古墳群)の年代観は、近年急速に検討が進んだ三陸沿岸部の古代の土器研究(宇部 2013、米田・佐藤 2016)を踏まえて再検討し、位置付けていく必要がある。
- (27) 村田 2016は、岩手県沿岸部における奥州藤原氏時代の遺構・遺物を集成し、内陸部との比較を通して、沿岸部の特徴をまとめた。一遺跡当たりの遺構・遺物の検出数の少なさ、遺構の検出割合の低さ、過去の集成で未確認だった北部での遺跡の確認、宮古市田鎮車堂前遺跡・釜石市川原遺跡など「平泉セット」を有する沿岸部の遺跡の存在などを指摘する。
- (28) 山田町教育委員会 2002。製鉄炉・炭窯3遺構の放射性炭素年代測定が実施されており、ややばらつきがあるが、11～12世紀代の測定値が提示されている。また、堅穴住居跡・鍛冶炉・炭窯跡など8遺構(一次調査分)・5遺構(二次調査分)の熱残留磁気測定が実施され、おおむね11世紀後半から12世紀代の考古地磁気推定年代の測定値が提示されている。

引用・参考文献

【論文等】

- 伊藤博幸 1990「東北北部における沈線文土器について—分類に関する基礎的操作と課題—」『海峡と古代蝦夷』
- 井上雅孝 2000「[発表要旨] 東北・北海道」、出土銭貨研究会・第7回研究大会資料集『畿内・七道からみた古代銭貨』
- 岩手県立博物館 1982『岩手の土器—県内出土資料の集成—』
- 岩手県立博物館 2005『縄文北緯40°～前・中期の北東北～』
- 岩手考古学会 2005『2005年度岩手考古学会第33回研究大会(山田大会) 古代閉伊地方の末期古墳と鉄生産—房の沢古墳と古代鉄生産遺跡—資料集』、同所収論考: 佐藤良和「山田町房の沢古墳群の調査成果—古墳群からみる蝦夷社会の一面—」
- 岩手考古学会 2016『岩手考古学会第48回研究大会 考古資料にみる「平泉」とその周辺』、同所収論考: 村田 淳「岩手県沿岸部の様相」
- 宇部則保 2013「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』第2号、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
- 小林達雄編 2008『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション、同所収論考: 大沼忠春「特殊な施文具—魚骨文とオオバコ文」、小保内裕之「陸奥大木系土器(榎林式・最花式・大木10式併行土器)」、茅野嘉雄「円筒下層式土器」、早瀬亮介「前

- 期大木式土器」、中野幸大「大木7 a～8 b式土器」、森 幸彦「大木9・10式土器」
- 佐藤良和 1998「岩手県沿岸部の土師器の変遷－山田町周辺の遺跡を中心に－」『紀要』XVIII、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 七ヶ浜町歴史資料館 2018『大木罎貝塚 国史跡指定50周年記念企画展図録』
- 杉本 良 2001「赤彩球胴甕再考(1)」『北上市立博物館研究報告』第13号
- 杉本 良 2002「赤彩球胴甕再考(2)」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』2号
- 高田和徳 2005『シリーズ「遺跡を学ぶ」015 縄文のイエとムラの風景・御所野遺跡』新泉社
- 高橋静歩 2007「東北地方北部の赤彩土師器から蝦夷集団の動向を探る」『岩手考古学』第19号
- 辻 秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基礎研究B)研究成果報告書 東北学院大学文学部、同所収論考:宇部則保 2007「青森県南部～岩手県北部」、佐藤敏幸 2007「宮城県北部・沿岸部」
- 福島正和 2019「岩手における土師器製作技術の研究」『紀要』第39号、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 星 雅之 2002「縄文時代前期十和田中掬テフラ降下期集落の検討－岩手県山田町沢田Ⅰ遺跡の考察－」『紀要』XXI、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 光井文行 1987「7・8世紀にみられる沈線文をもつ土器について－北上川中流域を中心に－」『紀要』VII、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 米田 寛・佐藤 剛 2016「岩手県域の太平洋沿岸中部地域における6世紀から8世紀の土器様相について」『紀要』第35号、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 米田 寛・高橋静歩・河本純一・佐々木あゆみ・酒井野々子 2017「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究(1)－石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、古館Ⅱ遺跡、千苺遺跡資料を中心に－」『紀要』第36号、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 米田 寛・高橋静歩・河本純一 2018「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究(2)－東北地方北部の赤彩土器を探る－」『紀要』第37号、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 米田 寛・高橋静歩・河本純一 2019「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究(3)」『紀要』第38号、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 八木光則 2010『古代蝦夷社会の成立』同成社
- 【報告書等】**
- 岩手県埋蔵文化財センター※財団法人岩手県埋蔵文化財センター(昭和52年から)、(財)岩手県文化振興事業団(昭和60年から)から、(公財)岩手県文化振興事業団(平成23年から)
- 1983『赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第58集
- 1997『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集
- 1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書 第1次・第2次・第3次』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集
- 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書 第一分冊(一～三次調査)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集
- 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書 第二分冊(四次調査)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集
- 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第342集※第五次調査
- 2004『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第434集
- 2004『島田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集
- 2008『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集
- 2015『間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第640集
- 2015『津軽石大森遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第641集
- 2017『クク井遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第667集
- 2018『浜川目沢田Ⅰ遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第689集
- 2019『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第694集
- 2020『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第719集
- 北上市立埋蔵文化財センター 2016『江釣子古墳群(2013年度)』北上市埋蔵文化財調査報告第120集
- 滝沢村教育委員会 1989『高柳遺跡 室小路Ⅱ遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第9集
- 滝沢村教育委員会 2009『狐洞遺跡発掘調査報告書』滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第5集
- 野田村教育委員会 1987『古館山－昭和45年三日市場遺跡発掘調査報告書(遺物編)－』野田村文化財調査報告書
- 野田村復興村づくり推進課・野田村教育委員会 2015『蒲沢遺跡発掘調査報告書』野田村教育委員会埋蔵文化財調査報告書第5集
- 山田町教育委員会 2002『細浦Ⅳ・後山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』山田町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第9集

報告書抄録

ふりがな	さわだ3いせきはつつちょうさほうこくしよ							
書名	沢田Ⅲ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第722集							
編著者名	阿部勝則・廣瀬時習・河本純一・佐藤あゆみ							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2021年3月12日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さわだ3いせき 沢田Ⅲ遺跡	いわてけんしもへいぐん 岩手県下閉伊郡 やまだまちやまだ 山田町山田 だいちわり 第3地割33-1 ほか	03482	LG94-0024	39度	141度	2013.04.09 ～ 2013.12.06	6,000 ㎡	三陸沿岸道路 建設事業に伴 う緊急発掘調 査
				28分	57分	2014.04.08 ～ 2014.11.28		
				52秒	1秒		3,600 ㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
沢田Ⅲ遺跡	集落跡 生産地跡	縄文時代	竪穴住居跡	98棟	縄文土器	300箱	・縄文時代の集落跡 ・アサリ主体の貝層 ・トチノキ・クリな どの炭化種実 ・古代の集落跡 ・赤彩土器 ・和銅開珎 ・古代の鉄生産関連 炉跡 ・中世の陶器	
			土坑	112基	土師器	10箱		
			炉跡・焼土遺構	40基	土製品	10箱		
		古代	竪穴住居跡	26棟	石器	25箱		
			土坑	2基	石製品	23箱		
			炉跡・焼土遺構	2基	陶磁器	1.5箱		
			鉄生産関連炉跡	20基	金属製品	1箱		
		中世以降	鉄生産関連工房跡	4基	銭貨	1箱		
			炭窯跡	13基	鉄滓類	30箱		
			竪穴状遺構	2棟	動物遺存体	72箱		
不明	墓壇	1基	植物遺存体	20箱				
	貝層	数個						
			土坑	47基				
要約	<p>沢田Ⅲ遺跡は、山田湾北西側の山地・丘陵地帯から低地部にかけて広がる縄文時代・古代・中世の複合遺跡である。調査区は、微地形により尾根部・谷部・低地部の3か所に分かれる。尾根部から低地部にかけては、縄文時代前期・中期の竪穴住居跡とフラスコ状土坑が高密度で分布する集落跡が確認された。縄文時代の竪穴住居跡やフラスコ状土坑からは、アサリ主体の貝類・獣骨類などの動物遺存体が確認された。また、フラスコ状土坑からは、トチノキ、竪穴住居跡からクリを主とする堅果類がまとまって確認された。当該期の食料事情を推測することのできる貴重な資料である。</p> <p>谷部から低地部にかけては、古代（7世紀前半から中葉、7世紀末から8世紀前半）の竪穴住居跡が分布する。赤彩土器や和銅開珎も確認された。谷部の南向きの傾斜地には、古代（11～12世紀代）の鉄生産関連遺構がまとまって確認された。</p> <p>中世の竪穴建物や12世紀代の陶器も確認された。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第722集

沢田皿遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査
(第1分冊 本文・分析・表)

印刷 令和3年3月1日

発行 令和3年3月12日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号
電話 (0193) 62-1711

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 永代印刷株式会社
〒020-0857 岩手県盛岡市北飯岡1丁目8番30号
電話 (019) 636-0011